

マルクス・レーニン主義通信

共産主義者同盟(全国委)
マルクス・レーニン主義派

通卷 23号

- 七八臨時国会の動向 ······
資本主義の危機と既成労働運動 ······
タイ反革命クトデーター糾弾 ······
市場再分割戦と列強間の対立 ······
どのようにして「第三期」を清算すべきか ······

— 第二次ブンド総括 — (6)

31 26/9/12 /

11

七八臨時国会の動向

九月一六日に召集された七八臨時国会は、しばらく空転していたが、九月二二日の「ロッキード事件の徹底究明」のノ保障と「国鉄・電電公社職員の賃上げに関する公労委仲裁裁定」取り扱いについて「引き続き各党間で検討を続ける」との「頭了解」（九・二三、毎日）などの五党合意によつて、審議に入った。これまで討議されてきたテーマは、①ロッキード問題、②ミグ25事件と対ソ外交、③財政、④災害、冷害対策、⑤

「共産党スパイ査問」事件、などである。だが、その特徴は、⑤のテーマなどに見られるように総選挙を目指した、他党派批判と自党の印象づけと言えるだろう。

そして、今国会が明らかにしているのは、三木のアルジヨア的本性がいよいよ鮮明になったことと、「革新」政党の堕落、無力さに他ならない。

ロッキード「幕引き」

策動の前面化

今国会での「ロッキード究明」に関する三木の所信表明や、代表質問に対する答弁は、三木の「役者ぶり」を暴露した。

「この三木の反動化は、反三木派の反動派と妥協したことの不可避的帰結であ

り、「国民の味方」という仮面がはげ落ち、アルジヨアジーの本性がさらけだされてきたことを示している」（『通信』前号）といふ我々の指摘が、いよいよ明らかになつたことである。

三木は、「適当な時期に」中間報告をするとして、議員質問に言及せず「最前」を提供する。しかし、刑訴法の精神からいって秘密会にしてもらいたい」（九・二八、朝日）と述べた同二七日の衆院本会議答弁、「証人喚問に例外はないが自民党總裁として指示することは適当でない」と証人喚問拒否を宣言した同二八日参院本会議答弁、双方を再確認した同日

の衆院本会議答弁と、全く「ロッキード

究明」を実行する気がないこと、その羊頭狗肉ぶりを示したのである。

当然にもこのような三木の態度は、自民党反三木派を喜ばしめるものであった。「野党やマスコミは内閣の責任で灰色高官を公表すると受けとめているが、首相の考えはそうではないことがはつきりした」（田中龍夫・福田派）、「もともと何もかも公表しろなどというのはどんでもない。首相のいうように刑訴法に基づいて処理するのが当然だ」（船田肇党協代表）。

「首相も勉強したらしく、ようやく（刑訴法の）解釈がわかつてきたようだ」（江崎・田中派）、等々。このことは、我々の指摘が正しかったことを示しているのだ。

この三木の「国会にゲタをあずける」という答弁は、社共を筆頭とする「議会制民主主義」の幻想のとりこになつている部分をも巻き込み、ロッキード事件「暮引き」を計るもの以外ではない。しかも、「政治的道義的責任の追及は国会がやることで政府の役割はそれに協力する

たのが、いわゆる「ニセ電話事件」である。それは、八月四日深夜の、布施健検事総長を語る男と三木との電話問答のテープを、数日後に京都地裁判事補鬼頭某が読売新聞に持ち込み、八月一五日の週刊新潮に掲載されたという事件である。

電話内容は、三木に「指揮権発動」の言質を迫つたものであるらしい。こゝから、「黒い高官」の防衛を計るもの、三木の言質をとり公表して三木の追い落しを計つたもの等の憶測がなされている。だが確実なことは、独占資本主義、金融資本主義の本性に基づく権力犯罪としてのロッキード疑惑に関連して、ブルジョアジーの更なる権力犯罪、腐敗ぶりが暴露されたということであり、又、司法権力の反動性、退廃ぶりが露呈したということである。

同時に見のがしてならないのは、現在ブルジョア・マスコミがこぞつてとりあげていることが、三木に対する「灰色高官」名公表の要求をそらす役割を果たすことである。もちろん要求する社

こと、これは四月の両院議長裁定に沿つたものだ」（一〇・五、参院）といふよ

うに、「議長裁定」を掲げてそれを行なうにしていることを見れば、自民党と妥協した社共の責は明らかではないか。

こうして、一〇月一五日公表された「中間報告」は、類型と人數のみがわかる判

じ物風のものであり、田中が収賄した五億円の使途「捜査したが、明らかにできなかつた」、PXLをめぐる疑惑「

現状のところ犯罪の容疑は認められない」

児玉ルート「捜査を続行中」というよう

に、何も明らかにするものではありえなかつた。

だが、この「報告」にひそむブルジョ

アジーの狙いを暴露しなければならない。

その第一は、ブルジョアジーの歎いたレールの上に「ロッキード究明」をのせる

ことである。事実、この「報告」後は、

「灰色高官」は、実数一三人であるとか、いや二人であるとかに関心をスリカえ

ているし、「灰色高官」の「人権」（！）

（などが問題になるに至つてゐるのである。

（などが問題になるに至つてゐるのである。

「ミグニ五」事件

その要因とする権力犯罪、企業犯罪である。

これが三木を追及しえないことは明らかであるが、ブルジョアジーは、ちょっとし

た譲歩も身を危うくするという危機感をもつてゐるのである。だからして、「再発防止策」なども、ペテン的なものであ

ることは自明である。三木は、「政治家、高級官僚の資産公開、特別検察官、行政監察官の新設などの新制度のほか、政治資金規正法、公選法、刑法、所得税改正」といったところ」（一〇・一七、朝日）を考へてゐるらしい。だが、前二者などは実現しそうにない。

又、「政治資金規正法」は、企業献金の合法化を遂行するものであり、まして、「公選法」は、ビラ規制法等、選挙制度を一層不平等化、反動化させるものであつたではないか。そもそも三木のいう「カネのかゝる選挙がロッキード事件の大の原因」などということがウソツバチ

の合法化を遂行するものであり、まして、この日米同盟の陰陥な側面をさらしたのがミグ問題である。坂田防衛廳長官は衆參の内閣委で「中間総括」を行うと語つてゐる。だが、このミグ²⁵問題は、「侵入機の調査は国際法上、当然許される」（一〇・四、参院）などと大見栄を切つたのはいいが、自力では調査できず、米帝の力をかりることになつたのである。

つたではないか。そして三木のいう「をさぐるものではない」と言いのがれをしていたが、防衛廳は、「時間の制約さえていたが、防衛廳は「安保に基づく協力」を語つてゐたのに、政府は、「共同調査」ではないと言いのがれをしてきたのである。

ロッキード事件は、これまで何度も述べてきたように、帝国主義が不可避に生み出るものであり、米日「韓」同盟をもぬけになつてゐることひとつとつてみて

そして、「丸紅」「全日空」ルートの解明は終つたとされるのである。

第二は、田中收賄の性格、PXLにか

らむ日米同盟、戦争疑獄の側面の捨象などにより、つとめてロッキード事件を

個人の汚職のまゝで「結着」づけようと

はつきりするとかいふように、検察、司法権力の「正義」幻想を強めることであ

る。

つまり、「中間報告」は、社共が語る

ように、「後退」などではなく、積極的な性格を有しているのである。三木の階級的性格をとらえつくしていた者は、「

中間報告」に何の幻想ももつはずがなかつたし、逆に言えば、社共が「中間報告」

に「失望」したのは、彼らが三木幻想の通りになつていていたということを証明しているのである。

第三は、「児玉ルートについて、でき

る限り迅速にその真相を解明するよう捜査を続行中である」とか、全とは公判で

個人の汚職のまゝで「結着」づけようと

はつきりするとかいふように、検察、司法権力の「正義」幻想を強めることであ

る。

も、どれが眞実かは明々白々ではないか。

このミグ25問題は、日ソ関係をもじりアにした。ソ連社帝は、九月二八日の小坂・クロムイコ会談では水一杯も出さず、ビザ發給まで行なわなかつた。このことは「領土問題で話し合うといったことはなく、考えていない」「安全操業問題については、ソ連の法律によつて違反は处罚する」（九二九、朝日夕刊）と宣言し、又、九月二六日報道では、開幕使節団のビザ發給まで行なわなかつた。このことは、ソ連社帝のデタント、アジア安保の本質を示している。すなわち、帝国主義と手を組んだ上で、自らの霸權の拡大を對外政策の中心にすえていることである。

このようなソ連の対応に対し、日帝ブルジョアジーは、「北方領土返還」のボルテージを一段と強めた。だが、このブルジョアジーのキャンペーンは極めて反動的なものである。「歯舞・色丹・国後・択捉——これらの島々は、私たちの父祖が血と汗で開拓してきた土地。日本人だけが住み、一度も外国の領土となつてゐる。だが憲法改悪が、惡しなければ日帝は侵略しえない」などといふつもりはない。だが憲法改悪が、その体制を一層打ち固める強力なテコとなることは明らかである。

これと軌を一にして、政府は、ポスト四次防の「防衛計画の大綱」を明らかにしつつある。これは、今後は、単年度の防衛予算の積み上げ形式をとり、量より質の向上をめざす十年計画である。つまり、なし崩しの歯止めなし増強といふのである。この陥陥な計画の第一歩として、次期主力戦闘機（F-X）が防衛庁の航空幕僚監部で、P一五、一七〇機と決められた。次期対潜しよう戒機（P-X上）なども、統々、決定されていくであろう。

労働者階級は、この「自衛」を口実とした軍事力増強に反対しなければならぬ。アにした軍事力増強に反対しなければならぬ

たことがありません。歴史的にみて、

一九五一年サンフランシスコ対日平和

条約締結」（同）

に、わが國固有の領土です」（政府広報）といふものである。

たのが、ソ連社帝と日帝との、どちらが四

虐殺、隸屬化、そして資本主義の原薙

に、そこが昔から自國の領土だったと宣

言した事例を、我々はいくつも知つてい

る。日帝も又、過去の犯罪を正当化し、

自らの膨張政策を遂行せんとしているの

ではないか。帝国主義が他民族を侵略・抑圧

するかという対立以外ではないのである。

ミグ25事件に対する社共の対応は、な

いふ。それは、祖国国防衛主義に通ずる

ものである。だが、労働者階級にとって、立によって景気が回復するものとされて

いるのである。

この財政特例法案は、十月七日、参院

大蔵委で審議が始まり、同一日参院本

会議で可決され衆院にまわされ、同時午

後、スピード可決された。ブルジョア・エコノミストは、「財特法が成立したことにより、企業の投資マインドがかなり

前向きになるとと思う」（岡日銀調査局長）

と順調に景気が回復するかに語り始めた。

だが、はたしてそうであろうか？ 我々はすでに戦後最大の不況が「高度成長」

による過剰生産、過剰資本を本質とする

ものであることを明らかにしてきた。ブルジョアジー自らが、生産を拡大し、操

業率を上昇させて、「利潤率は昭和四〇年代」の平均以下と語っているのであ

る（七六年版「経済白書」）。このこと

象は冷夏による夏物衣料の売れ行き不振や農作物の不作、さらには財政特例法案

は、利潤追求を唯一の目的とする資本主義にとって、新規投資における期待利潤

率の低下によって、景気の回復が、即設備投資とならないことを意味しているのである。

このような事態を、又ぞろインフレ政策で救済せんとするのが赤字国債の発行に他ならない。赤字国債の発行は、日銀の貰いオペレーションを不可避とじており、確実にインフレを惹起する。しかも、赤字国債の発行によつても、設備投資は増加しえず、独占資本は「もう一度金利を下げるもいたい」（帶刀トーメン常務）と、露骨にインフレ政策を要求しているのである。もはや、独占資本は、インフレに寄生し、独占価格によつてしか利潤を得得しなくなっているのだ。國家独占資本主義は、今や、その寄生性、腐朽性の極にある。赤字国債の定着はその一つのマルクマールである。

次に、国鉄運賃値上げ法案はどうか？ 正式名称は「国鉄運賃法及び国鉄法の一部を改正する法案」というこの法案は、①旅客運賃を平均五〇・四%、貨物運賃を平均五三・九%値上げする②五〇年度を平均五三・九%値上げする③五〇年度

に目に見えない形で収奪されるかの違い

でしかないのである。まさに、「鉄道の建設は、単純な、自然的な、民主主義的な、文化的な企業のようにみえる。それは、資本主義的奴隸制を粉飾することにたいして報酬をもらつてゐるブルジョア教授たちの眼には、また小ブルジョア的俗物どもの眼には、そのようなものとして映じる」（レーニン『帝国主義論』）といふことなのである。

このような小ブルジョア的俗物（社共は、ブルジョアジーが中期国債（五年もの割引債）の発行、連續して所得税減税を見送り、医療費の反動的改悪（老人医療の有料化など）、独禁法改正を見送り、等々、労働者大衆の間接的、直接的取奪、生活の悪化をもつて独占資本を救済せんとしている中で、非常に有害な役割をはたさざるをえない。

例えは、社会党は、「赤字国債の発行を財政法が認めていなければ、財政法の根柢となつてゐる現行憲法も、その発行を禁じている」（社会新報）と、

末の累積赤字三兆一六一〇億円のうち二兆五四〇〇億円相当分の債務をタナ上げにしたりえ、二〇年間で均等償還するための一年の元利払い分四四一億円を国の一般会計から助成する」というものである。

この「赤字」を口実としたブルジョアは、電電料金値上げ法案は、①電話基本料金を五一年度と五二年度の二回にわたり五割ずつ引き上げ、現行の二倍とする。②通話料を一度放七円から十円に引き上げる③電話を新規に取り付ける時の設備料を五万円から八万円に引き上げる④一般電報を現行の二倍、慶弔電報を三倍に引き上げる、というものである。

この値上げ二法案に対するブルジョアのキャンペーンは、すさまじいものであった。彼らは、九月二十五日に、「国鉄は九月末で四〇〇億円の不渡りを出す」と語った。だがこれは、予算にちやんと計上されている資金を、保障にならないとするペテン的なものである。更に、十

月一八日に国鉄は、値上げが遅れたことによって、「休車」「サービス節減」を実施した。そして、國債のかわりに、「大蔵省証券」の発行をブルジョアジーに歓めるのである。それのみではない。中期国債の発行まで提言するのである。彼らは、一体、大蔵省証券や中期国債はインフレを引きおこさないとでも考へてゐるのであろうか。

社共は又、歳入増加の手段として、そろって「公平な租税政策」「税制民主化」をあげている。だが彼らは、根本的なことを忘れてゐる。企業が納める税金は、労働者の不払い労働が対象化された剩余価値の一部であるということを。そもそも社共は、財政赤字を、あたかも自民党の「無能」さによるものとしていること

の「無能」さによるものとしていることが誤つてゐるのである。今日の財政赤字は、一言でいうならば、帝国主義の寄生性・腐朽性の現われ以外ではないのだ。このような社共が、今国会の一つのテマ、災害・冷害対策に関して無力であるのは明らかである。彼らは、又しても自民党的「無策」をなげくだけなのだから。確かに、台風一七号による災害、あるいは、冷害が、防止策の不足によつてもたらされた「人災」であることは言えるだろう。だが、それを自民党的、個々の施策を原因とするのは、全く誤りである。それは、資本主義が資本主義である限り避けられないことなのである。

高利潤の追求のみを目的とする私的所有的の支配する社会では、当然のことなのである。独占資本は、ただ自らの利潤獲得のためにのみ自然を改造する。「生産はただ資本のための生産だ」ということ、そしてそれは、反対に生産手段が生産者たちの社会のために生産過程を絶えず拡大形成していくための単なる手段なのではないということである」（資本論）

せざるをえないと発表した。まさに脅し現せんとするえげつない手段を用いだしだのである。

これらの値上げ二法案は、仲裁裁定で可決され、十月一三日、参院審議が開始されるというスピードぶりで成立されんとしている。

社会党が裏取り引きしたことによつて（別稿参照）、わずか四日ほどで委員会で開かれ、十月一三日、参院審議が開始される。國鉄、電々は、明確に一つの独占資本に他ならない。それは、収益を問題にし、当然にも労働者大衆の収奪をもつて帳じりを合わそうとするのである。この「赤字」の国庫負担という空文句を叫ぶ社共の攻撃は、明らかに資本主義の犠牲を労働者大衆に転嫁、強要するものである。國鉄、電々は、明確に一つの独占資本に他ならない。それは、収益を問題にし、当然にも労働者大衆の収奪をもつて帳じりを合わそうとするのである。この「赤字」の国庫負担という空文句を叫ぶ社共は、当然にも無力であった。よしんば、「國庫負担」が実現したとしても、それは労働者大衆の税金によってまかなわれる所以あり、一挙に収奪されるか、徐々にたのである。

災害・冷害と社共

このような社共が、今国会の一つの

テマ、災害・冷害対策に関して無力であ

る

この本質をぬきにして、あたかも独占

資本を「規制」すれば、あるいは革新政
權ができれば、災害はなくなるかのよう

に語ってきた社共は、自民党とともに共

通の責を負っているのである。

東北を中心とする冷害も同様の側面を

有している。その特徴は、獎励米（「う
まい米」）がのきなみやられ、機械化・

化學化された水田がひどかったことなど

であり、とりわけ、兼業農家が打撃をう
けたことは言を待たない。獎励米は、自

主流通米制度の導入により、それまでに
改良された対冷品種にかわって作付けら
れてきた水田が冷害にやられたといいう

のは、逆説的に聞えるかもしれない。だ
が、機械化は、農業機械独占メークーの

利潤獲得のための宣伝と、農民の収益増
大の要求——これは資本主義によつて強制

されてきた水田が冷害にやられたといいう

のは、逆説的に聞えるかもしれない。だ
が、機械化は、農業機械独占メークーの

利潤獲得のための宣伝と、農民の収益増
大の要求——これは資本主義によつて強制

での労働者の悪化につながるであろう。

これらの「人災」をなくするためには、
生産手段（もちろん土地も含まれる）を
社会的所所有に転化する以外にはないので
ある。

混迷の自民党と 社共の無力さ

先の自民党抗争取扱の合意点のひとつ
だった臨時党大会が総選挙後に延期され
た。それは、一〇月二九日の総務会で決
定されたものである。

三木対反三木の自民党内抗争は、九月
三〇日の内田発言で再々度表面化した。

内田発言とは、同日の自民党幹事會で、
「『党則上、この大会で三木総裁（首相）

の解任を決め、新総裁を選ぶことは無理
がある』と述べ」（一〇・一、朝日）た

るものである。

これに対して、挙党協幹部は、「いま
の党則は、平常な党内情勢のときに適用

される前提でつくられている。内田発言

は、いまの異常な党情にはあてはまらない

。従つて、党則の平面的な条文解釈を
述べたにすぎない」と反発し、一〇月一
日の挙党協常任世話人会議で「党大会の

主な議題は人心一新（三木退陣）である」
ことを確認した。

内田幹事長は、一日の役員会
では「私の発言は単なる党則の解釈。党
大会で、三木退陣だってないわけじゃな
い」と「中立」の立場を示している。だ
が、先の内田発言が、反三木派（反動派
の團結を固める役割を果したことはいな
めない。挙党協は、一〇月一五日に「愛
國（）」を福田に一本化、これを二〇日の
反三木派各派代表者会議で正式に決定し、

反三木派の弱点の一つであった派閥ごと
の乱れをそろえた。これは、もちろん三
一日の臨時党大会での三木退陣を狙うも
のではあったが、もしそれが不可能でも、
「三木による総選挙」というイメージを

払拭し、総選挙直後の三木退陣をもくろ
むものである。福田は、「国に奉仕する

機会がきた」（一〇・二〇、朝日夕刊）

と語った。

同時に挙党協は、「三木総裁の退陣を
求め、新総裁を中心とした清新協力な態勢を

作つて再出発しなければならない」と謳
つた宣言を発し、「派閥解消」等の「刷
新」（「出直し改革」か？）遂行の方針

も明らかにした。この「派閥解消」とは、
福田によれば「（）全党的な適材適所人事

②党組織財政の改革③衆参両院選挙制度
の改革」（一〇・二一、朝日）というも
のである。だが、この「派閥解消」とは、
ウヤムヤにし、ロッキー事件の曖昧化
木はどうか？ 三木は、九月二七日の國
会答弁で「一〇月の自民党臨時大会で總
裁の辞任を考えていなし首相の地位も
同様だ」（九・二八、朝日）と述べ、一
〇月一九日のNHK番組でも、「（）の党
会を人事大会にしない②総選挙後にやめ

……そなはあいには、資本主義は資本主
義でなくなる」（帝国主義論）である。
間によって食料や衣料の形で消費され
たらしたということなのである。更に、
われない——は、冷害対策にも十分に対応
できず、天候に見合った対応など不可能
であることによってひどかつたのである。
農業農家とかたてまでしか農業にたずさ
して、帝国主義はそれを頂点にまで高め
はなく、資本主義は本質的に都市と農村、
工業と農業との対立を生み出すこと、そ
と切り離された対策に責任転嫁するので
はなく、資本主義は本質的に都市と農村、
工業と農業との対立を生み出すこと、そ
して、帝国主義はそれを頂点にまで高め
ることの告発として明らかにしなければ
ならない。独占資本は、最も利潤を獲得
しうる産業に投資するのであって、生産
性の劣る農業への資本投下は敵遠されざ
るをえないものである。（もちろん、農民
に消費能力がある限り、そのギリギリの
限度まで、農業機械等を売りつけるとい
うこと、すなわち、農民からの収奪は行
うが）。

「もしも本主義が現在いたるところで、
工業よりもおぞろしく立ちおくれている
農業を發展させることができならば、
大拍車をかけだ。それは、さまざまなか
らない。

自民党農政は、このことを根本とし
づ、自らの専制維持のための政策として
様々なことを施行してきたのである。土
地改革しかり、食管制しかり。「米があ
まつている」というキャベンペーンの中で、
そして福島潟などにみられる減反政策の
中で、今度の冷害は、農民の貧困化に一
つの原因となることになり得る。

……そのばあいには、資本主義は資本主
義でなくなる」（帝国主義論）である。
つまり土地の豊穣性の持続の永久的自然条件
と切り離された対策に責任転嫁するので
はなく、資本主義は本質的に都市と農村、
工業と農業との対立を生み出すこと、そ
して、帝国主義はそれを頂点にまで高め
ることの告発として明らかにしなければ
ならない。独占資本は、最も利潤を獲得
しうる産業に投資するのであって、生産
性の劣る農業への資本投下は敵遠されざ
るをえないものである。（もちろん、農民
に消費能力がある限り、そのギリギリの
限度まで、農業機械等を売りつけるとい
うこと、すなわち、農民からの収奪は行
うが）。

「もしも本主義が現在いたるところで、
工業よりもおぞろしく立ちおくれている
農業を發展させることができならば、
大拍車をかけだ。それは、さまざまなか
らない。

自民党農政は、このことを根本とし
づ、自らの専制維持のための政策として
様々なことを施行してきたのである。土
地改革しかり、食管制しかり。「米があ
まつている」というキャベンペーンの中で、
そして福島潟などにみられる減反政策の
中で、今度の冷害は、農民の貧困化に一
つの原因となることになり得る。

……そのばあいには、資本主義は資本主
義でなくなる」（帝国主義論）である。
つまり土地の豊穣性の持続の永久的自然条件
と切り離された対策に責任転嫁するので
はなく、資本主義は本質的に都市と農村、
工業と農業との対立を生み出すこと、そ
して、帝国主義はそれを頂点にまで高め
ることの告発として明らかにしなければ
ならない。独占資本は、最も利潤を獲得
しうる産業に投資するのであって、生産
性の劣る農業への資本投下は敵遠されざ
るをえないものである。（もちろん、農民
に消費能力がある限り、そのギリギリの
限度まで、農業機械等を売りつけるとい
うこと、すなわち、農民からの収奪は行
うが）。

「もしも本主義が現在いたるところで、
工業よりもおぞろしく立ちおくれている
農業を發展させることができならば、
大拍車をかけだ。それは、さまざまなか
らない。

自民党農政は、このことを根本とし
づ、自らの専制維持のための政策として
様々なことを施行してきたのである。土
地改革しかり、食管制しかり。「米があ
まつている」というキャベンペーンの中で、
そして福島潟などにみられる減反政策の
中で、今度の冷害は、農民の貧困化に一
つの原因となることになり得る。

……そのばあいには、資本主義は資本主
義でなくなる」（帝国主義論）である。
つまり土地の豊穣性の持続の永久的自然条件
と切り離された対策に責任転嫁するので
はなく、資本主義は本質的に都市と農村、
工業と農業との対立を生み出すこと、そ
して、帝国主義はそれを頂点にまで高め
ることの告発として明らかにしなければ
ならない。独占資本は、最も利潤を獲得
しうる産業に投資するのであって、生産
性の劣る農業への資本投下は敵遠されざ
るをえないものである。（もちろん、農民
に消費能力がある限り、そのギリギリの
限度まで、農業機械等を売りつけるとい
うこと、すなわち、農民からの収奪は行
うが）。

「もしも本主義が現在いたるところで、
工業よりもおぞろしく立ちおくれている
農業を發展させることができならば、
大拍車をかけだ。それは、さまざまなか
らない。

自民党農政は、このことを根本とし
づ、自らの専制維持のための政策として
様々なことを施行してきたのである。土
地改革しかり、食管制しかり。「米があ
まつている」というキャベンペーンの中で、
そして福島潟などにみられる減反政策の
中で、今度の冷害は、農民の貧困化に一
つの原因となることになり得る。

……そのばあいには、資本主義は資本主
義でなくなる」（帝国主義論）である。
つまり土地の豊穣性の持続の永久的自然条件
と切り離された対策に責任転嫁するので
はなく、資本主義は本質的に都市と農村、
工業と農業との対立を生み出すこと、そ
して、帝国主義はそれを頂点にまで高め
ることの告発として明らかにしなければ
ならない。独占資本は、最も利潤を獲得
しうる産業に投資するのであって、生産
性の劣る農業への資本投下は敵遠されざ
るをえないものである。（もちろん、農民
に消費能力がある限り、そのギリギリの
限度まで、農業機械等を売りつけるとい
うこと、すなわち、農民からの収奪は行
うが）。

「もしも本主義が現在いたるところで、
工業よりもおぞろしく立ちおくれている
農業を發展させことができならば、
大拍車をかけだ。それは、さまざまなか
らない。

自民党農政は、このことを根本とし
づ、自らの専制維持のための政策として
様々なことを施行してきたのである。土
地改革しかり、食管制しかり。「米があ
まつている」というキャベンペーンの中で、
そして福島潟などにみられる減反政策の
中で、今度の冷害は、農民の貧困化に一
つの原因となることになり得る。

……そのばあいには、資本主義は資本主
義でなくなる」（帝国主義論）である。
つまり土地の豊穣性の持続の永久的自然条件
と切り離された対策に責任転嫁するので
はなく、資本主義は本質的に都市と農村、
工業と農業との対立を生み出すこと、そ
して、帝国主義はそれを頂点にまで高め
ることの告発として明らかにしなければ
ならない。独占資本は、最も利潤を獲得
しうる産業に投資するのであって、生産
性の劣る農業への資本投下は敵遠されざ
るをえないものである。（もちろん、農民
に消費能力がある限り、そのギリギリの
限度まで、農業機械等を売りつけるとい
うこと、すなわち、農民からの収奪は行
うが）。

「もしも本主義が現在いたるところで、
工業よりもおぞろしく立ちおくれている
農業を發展させことができならば、
大拍車をかけだ。それは、さまざまなか
らない。

自民党農政は、このことを根本とし
づ、自らの専制維持のための政策として
様々なことを施行してきたのである。土
地改革しかり、食管制しかり。「米があ
まつている」というキャベンペーンの中で、
そして福島潟などにみられる減反政策の
中で、今度の冷害は、農民の貧困化に一
つの原因となることになり得る。

……そのばあいには、資本主義は資本主
義でなくなる」（帝国主義論）である。
つまり土地の豊穣性の持続の永久的自然条件
と切り離された対策に責任転嫁するので
はなく、資本主義は本質的に都市と農村、
工業と農業との対立を生み出すこと、そ
して、帝国主義はそれを頂点にまで高め
ることの告発として明らかにしなければ
ならない。独占資本は、最も利潤を獲得
しうる産業に投資するのであって、生産
性の劣る農業への資本投下は敵遠されざ
るをえないものである。（もちろん、農民
に消費能力がある限り、そのギリギリの
限度まで、農業機械等を売りつけるとい
うこと、すなわち、農民からの収奪は行
うが）。

「もしも本主義が現在いたるところで、
工業よりもおぞろしく立ちおくれている
農業を發展させことができならば、
大拍車をかけだ。それは、さまざまなか
らない。

自民党農政は、このことを根本とし
づ、自らの専制維持のための政策として
様々なことを施行してきたのである。土
地改革しかり、食管制しかり。「米があ
まつている」というキャベンペーンの中で、
そして福島潟などにみられる減反政策の
中で、今度の冷害は、農民の貧困化に一
つの原因となることになり得る。

……そのばあいには、資本主義は資本主
義でなくなる」（帝国主義論）である。
つまり土地の豊穣性の持続の永久的自然条件
と切り離された対策に責任転嫁するので
はなく、資本主義は本質的に都市と農村、
工業と農業との対立を生み出すこと、そ
して、帝国主義はそれを頂点にまで高め
ることの告発として明らかにしなければ
ならない。独占資本は、最も利潤を獲得
しうる産業に投資するのであって、生産
性の劣る農業への資本投下は敵遠されざ
るをえないものである。（もちろん、農民
に消費能力がある限り、そのギリギリの
限度まで、農業機械等を売りつけるとい
うこと、すなわち、農民からの収奪は行
うが）。

「もしも本主義が現在いたるところで、
工業よりもおぞろしく立ちおくれている
農業を發展させことができならば、
大拍車をかけだ。それは、さまざまなか
らない。

自民党農政は、このことを根本とし
づ、自らの専制維持のための政策として
様々なことを施行してきたのである。土
地改革しかり、食管制しかり。「米があ
まつている」というキャベンペーンの中で、
そして福島潟などにみられる減反政策の
中で、今度の冷害は、農民の貧困化に一
つの原因となることになり得る。

……そのばあいには、資本主義は資本主
義でなくなる」（帝国主義論）である。
つまり土地の豊穣性の持続の永久的自然条件
と切り離された対策に責任転嫁するので
はなく、資本主義は本質的に都市と農村、
工業と農業との対立を生み出すこと、そ
して、帝国主義はそれを頂点にまで高め
ることの告発として明らかにしなければ
ならない。独占資本は、最も利潤を獲得
しうる産業に投資するのであって、生産
性の劣る農業への資本投下は敵遠されざ
るをえないものである。（もちろん、農民
に消費能力がある限り、そのギリギリの
限度まで、農業機械等を売りつけるとい
うこと、すなわち、農民からの収奪は行
うが）。

「もしも本主義が現在いたるところで、
工業よりもおぞろしく立ちおくれている
農業を發展させことができならば、
大拍車をかけだ。それは、さまざまなか
らない。

自民党農政は、このことを根本とし
づ、自らの専制維持のための政策として
様々なことを施行してきたのである。土
地改革しかり、食管制しかり。「米があ
まつている」というキャベンペーンの中で、
そして福島潟などにみられる減反政策の
中で、今度の冷害は、農民の貧困化に一
つの原因となることになり得る。

……そのばあいには、資本主義は資本主
義でなくなる」（帝国主義論）である。
つまり土地の豊穣性の持続の永久的自然条件
と切り離された対策に責任転嫁するので
はなく、資本主義は本質的に都市と農村、
工業と農業との対立を生み出すこと、そ
して、帝国主義はそれを頂点にまで高め
ることの告発として明らかにしなければ
ならない。独占資本は、最も利潤を獲得
しうる産業に投資するのであって、生産
性の劣る農業への資本投下は敵遠されざ
るをえないものである。（もちろん、農民
に消費能力がある限り、そのギリギリの
限度まで、農業機械等を売りつけるとい
うこと、すなわち、農民からの収奪は行
うが）。

「もしも本主義が現在いたるところで、
工業よりもおぞろしく立ちおくれている
農業を發展させことができならば、
大拍車をかけだ。それは、さまざまなか
らない。

自民党農政は、このことを根本とし
づ、自らの専制維持のための政策として
様々なことを施行してきたのである。土
地改革しかり、食管制しかり。「米があ
まつている」というキャベンペーンの中で、
そして福島潟などにみられる減反政策の
中で、今度の冷害は、農民の貧困化に一
つの原因となることになり得る。

……そのばあいには、資本主義は資本主
義でなくなる」（帝国主義論）である。
つまり土地の豊穣性の持続の永久的自然条件
と切り離された対策に責任転嫁するので
はなく、資本主義は本質的に都市と農村、
工業と農業との対立を生み出すこと、そ
して、帝国主義はそれを頂点にまで高め
ることの告発として明らかにしなければ
ならない。独占資本は、最も利潤を獲得
しうる産業に投資するのであって、生産
性の劣る農業への資本投下は敵遠されざ
るをえないものである。（もちろん、農民
に消費能力がある限り、そのギリギリの
限度まで、農業機械等を売りつけるとい
うこと、すなわち、農民からの収奪は行
うが）。

「もしも本主義が現在いたるところで、
工業よりもおぞろしく立ちおくれている
農業を發展させことができならば、
大拍車をかけだ。それは、さまざまなか
らない。

自民党農政は、このことを根本とし
づ、自らの専制維持のための政策として
様々なことを施行してきたのである。土
地改革しかり、食管制しかり。「米があ
まつている」というキャベンペーンの中で、
そして福島潟などにみられる減反政策の
中で、今度の冷害は、農民の貧困化に一
つの原因となることになり得る。

る首相に国民の信を問う資格はない」（一〇・二〇、朝日）などと、断乎がんばる姿勢を維持し、国会答弁では、「中間報告の灰色高官の中に私ははいつていな」と首相の地位を利用して「クリーン三木」を訴えるありさまであった。

三木は、朝日新聞社世論調査の支持率三五%への上昇などの「国民」の三木幻想に依拠し、再々度、その「ねばり腰」を發揮するつもりであり、臨時党大会を「人事」ぬきで乗り切り総選挙で勝負する狙いなのである。

かくして、「……分裂状態ではない。

……三木さんが脱党すれば、それだけ脱落者があるということだ」（一〇・二一）、「朝日新聞インタビュー」での福田）、「党が割れることもやむをえない」（一〇・二二、三木派総会）とつっぱりあうちでの双方の鬭いは、一〇・三一臨時党大会の双方の鬭いは、一〇・三一臨時党大会をめぐって極度に煮つまつたのである。

それは、内田幹事長の折衝にもかゝわらず、大会準備委構成等々で火花を散らした。拳党協は、二十五日に独自の選対本

部を設置している。そして、最低「総選挙後退陣」の確約とりつけに全力を注いだ。

そして、臨時大会の延期は、総選挙を

焦點としてうかびあがらせてきた。三木

は、自民党の現勢力の維持を自己の主張

の「国民」支持として考えており、反三

木派は又、三木政権を「選管内閣」とし

て位置付け、総選挙後の退陣実現のため

に福田体制を押し出しての選挙勝利を考

えている。つまり、双方にとつて、自民

党独裁の維持という点では全く違ひがないのだが。

自民党は一〇月二三日に「総選挙公約」を発表した。それは、「五つの基本政策」

の第一に、「参院全国区の比例代表制と

地方区での総定数内での定数調整の実現、

衆院では、小選挙区に比例代表制併用」

（一〇・二四、朝日）を謳っている。

この「四割の票でも八割の議席をとれ

る」という悪名高き小選挙区制は、アル

ジアアジー自らが「五五年体制崩壊を

認めたことである。アルジアアジーは、

認められたことである。アルジアアジーは、

金を出すもの）制定とあわせて、疑似二

大政党制」「五五年体制」の手直しを計

（通信前号）。「五五年体制」は、自民

党總裁に首相の座を保障しているのであ

り、総裁選は党内問題で法律にひっか

らす、半ば公然と「実弾」を発射した

のである。田中こそ、「五五年体制」の

本質と崩壊の象徴であった。そしてアル

ジアアジーは、その手直しがだめな場合

昨年の三木の「小選挙区制は五党が一致

しなくともやれる」という国会答弁にも

明らかのように、自らの手でその突破

を実現するつもりなのである。

このようないかくした攻撃を謳った「総選挙公約」

（一〇月一四日）

の要求（①全資料公表のための米国との再

交渉②政府・三木の責任による「灰色高

官」の公表③議員喚問④小佐野の偽証告

発⑤構造汚職の再防止対策）を提出した

が、三木にさらりとかわされ、なすすべ

もないありさまである。

更に、共産党のだまきかけんを浮きぼりにしたのは「スパイ査問事件」であつた。民社、公明（自民）の共産党批判が反共主義であるのは明らかである。彼らは、目の前にある総選挙に向け、自らの票をふやすために共産党のイメージダウノンを狙つているのである。

だが、共産党のこれに対する弁解も又、あざけたものであった。共産党は、自己の闘いを正当化するのではなく、「治安維持法が問題である」「人種不適の原理に反するとして治安維持法を排除した戰後憲法に背いていた」「被害者はこちらだ」と許しを乞うてゐるのである。このことは、共産党の過去の鬭いは、革命鬭争ではなく戦後憲法「人類普遍の原理」のための、すなわち現体制のための鬭い

ことである。

ロックード事件に関しても社共は、公明、民社とともに一〇月一六日、五項目

比例代表制との併用」「グライベン方式と

なる自社共闘の再現の下に、「政党法」

（一定の議員を有している政党に国から

支給するもの）制定とあわせて、疑似二

大政党制」「五五年体制」の手直しを計

（通信前号）。「五五年体制」は、自民

党總裁に首相の座を保障しているのであ

り、総裁選は党内問題で法律にひっか

らす、半ば公然と「実弾」を発射した

のである。田中こそ、「五五年体制」の

本質と崩壊の象徴であった。そしてアル

ジアアジーは、その手直しがだめな場合

昨年の三木の「小選挙区制は五党が一致

しなくともやれる」という国会答弁にも

明らかのように、自らの手でその突破

を実現するつもりなのである。

このようないかくした攻撃を謳った「総選挙公約」

（一〇月一四日）

の資金を要請しているのだ（一〇月一四日）

であつたということを言つてゐるのではなかいか。

しかも、上田耕一郎は、「治安維持法に賛成し、戦前の專制政治に賛成してお

いて、共産党的科学的社會主義の理論についてそういうこと（マルクス・レーニン主義と民主主義は両立しない等々）を

いうのは、まったくわれわれは受け取れない。我々の科学的社會主義は、自由と

反共主義であるのは明らかである。彼ら

は、目の前にある総選挙に向け、自らの

票をふやすために共産党のイメージダウ

ノンを狙つているのである。

戒せよ！史上最も民主的であったといわれるワイマール共和国はファシズムを生み出したのだ。新しくは、チリ、アジエンデ政権を想起せよ！

自民党が抗争を深め、腐敗を深めて、

社共が口にする「保革伯仲」「保革逆転」社会に対して、労働者階級は戦闘を強めている中で、彼らは自己の無力さ、腐敗などは、眞の革命党以外ではないのである。

ぶりをさらけだした。口先での社会主義行動における帝国主義を地でいっている。

資本主義の危機と

既成労働運動

はじめに

秋期闘争が、「制度」的要要求を掲げ闘かわれ（？）ている。要求項目の多少の相違はある、労働四団体は、「減税」「雇用」問題等を中心あげている。

この「制度闘争」は、今日のインフレ

と不況にしんぎんする労働者を資本主義の枠内で満足させるために、つまり、貢金奴隸として満足させておくためにうちだされているのである。これは、徹底して労働者の革命的意識の高揚をおそれ

て、労働者の革命的意識の高揚をおそれ

仲裁裁定問題と総評の裏切り

この間、民間大単産のブルジョア組合主義を軸とした「政策推進労組会議」の

仲裁裁定早期完全実施に向けた公労

の闘いは、社会党・総評（公労協）指導部の対政府交渉（ボス交）による値上げ法案の審議促進に協力することで完全実施を確約するという取引き一闘いの放棄によって收拾されてしまった。

公労協労働者は、夏期一時金の遅配のみならず、八・八%、一万二・四四四というクガイド・ラインの下での仲裁裁判をも引きのばされてきた。このことに對しては、「春闘でさえ『違法スト反対』を唱える鉄労（同盟）ですら、今回は『ストをするぞ』と言い出」（九・二六、毎日）すというように、官公労働者の戦闘的意識が高まっていたことを示していた。この労働者の憤激を、「現代の社会・政治体制全体との革命的闘争」へレーニン「新しい殺りく」と結びつけていたし、そうする以外に労働者の前進はありえなかつた。しかし、総評は、階級闘争の前進ではなく、後退の道―政府とのボス交で大衆闘争を裏切る―を選んだのである。これこそ一貫した総評の路

線であり、たゞ重なる春闘の敗北を何も反対の口実を作り、それに満足し、スト申込していないことの現われなのである。止指令を出したのである。

九月二〇日、政府・自民党は、「国鉄電電が膨大な赤字を抱えていることを理由に『値上げ法案が成立しなければ、ベアは実施できない』（九・二〇朝日）、ことを決定し、又、二四日の浦野労相と覚三役、そして石田運輸・福田郵政両相談の会談においても、「完全実施はした」との会談においても、「完全実施はした」とは、何よりもロッキード事件での口約において明らかのように、幻想を与える以外の何物でもなかつたではないか。このことはくり返すことの必要もないことであります。

だ。労働側にも法案成立のため協力してもらわねばならない（九・二五朝日）。いとる姿勢も意欲もつゆ程もなかつた。

ただ、「法案審議については各党間で十分審議を尽くすよう申し合せがあり、両国会答弁でも、この線はかわらなかつた。富塙事務局長は、「スト権ストの反省合には、完全実施が可能となるので、最大限の努力を払う」とのべており、「最大限の努力を払う」という三木流の「前向きの姿勢」に社会党・総評は、スト取

選挙前だからストをやらせた方が自民党に有利とかの、いろんな意見があるよ

うだ。慎重に事態を見極めて考えたい：

レーニンは、「『広範な人民大衆』（小ブルジョアジーと読め）をつきはなすことになりはしまいかと心配して、階級的觀点と階級闘争を拒否すること」（社会主義インタナシヨナルの現状と任務）を「日和見主義の思想的基礎」の一つとして上げている。富塚の主張こそ、この日和見主義者としての政治的性格を明確に示している。

「世論の『スト迷惑論』」というブルジョアキヤンペーンに汚染され、ましてや、スト羅ストの反省」とは、「『伝家の宝刀』たるストは春闘で一度でよい」という鬱わない方がよかつたという「反省」であり、今回のスト收拾は、その「反省」を行なったことに他ならない。総評は、総選挙を前にして、「柔軟な態度」リスト回避することで、「国民」（小ブルジョア）の一票をより多く社会党へ導くことができるという反労働者的判断によつて、労働者の鬱いを裏切つたのである。

九月二十五日、成田社会党委員長は、値

上げ法案に関して、「適正な値上げはやむを得ない」「（政府原案には）反対だが、政府がのめる国鉄再建案（対案）を出す」と、値上げ法案成立には反対しないこと、従来の絶対反対からの方針転換を表明した。

社会党は、「適正な値上げは」しかたのない、正当な値上げだといつてゐる

だ！「国民の国鉄」を守るためにには労働者は、ブルジョアジーの収奪が強化されても、それにあまんじなければならぬ

のである。

賃金抑制策に屈伏した 「国民春闘共闘会議」

資本主義の危機は、日和見主義者の「戦闘性」や「労働者の政党」なるスローガンの欺瞞性をあばき出してしまつた。

春闘におけるノガイド・ゾーン攻撃に

第一に賃上げ要求に関するでは、要求額作成の変更はあるが、何よりも「大幅賃上げ」要求を投げ捨てたことが特徴点である。この「大幅賃上げ」にかわって登場したのが、一〇月一八日第一回闘争企画会議（国民春闘会議）で決定された「社会的妥当性のある要求」（富塚）である。「社会的妥当性のある要求」とは、二六日、合化労連拡大中央委員会の「定期昇給込みで平均二万三千円、約一五%」とする提案によつて具体的になつてきた。これをうけて、横枝は、「具体的な春闘要求額を提示したことを歓迎する」（十

合主義者）宮田鉄鋼労連委員長は、「消費者物価の上昇分を最低限確保するとい」

た。

この横田の「五、六%」というノガイド・ゾーン攻撃は、政府見通しによる「実質経済成長率」五・六%程度にそつて

出されたものであり、それ以上の賃上げ線としてい」と「賃金自潔」論を訴えていた。この横田の「五、六%」とい

うノガイド・ゾーン攻撃は、政府見通しによる「実質経済成長率」五・六%程度にそつて

出されたものであり、それ以上の賃上げ

線としてい」と「賃金自潔」論を訴えていた。

この横田の「五、六%」とい

うノガイド・ゾーン攻撃は、政府見通しによ

る程度の賃上げを認めてきた。しかし、日本経済の危機が進行する中で、インフレ政策による利潤の確保を強め、そうすれば、賃上げよりも雇用機会の増大を優先させ、実質経済成長率を重視している

（一〇・二六、朝日）等々とのべ定年延長（年金・医療制度の改善、など）

（十・九朝日夕）である。

これに先だって、独占資本とブルジョア組合主義者は次のように語つていた。桜田日経連会長は、「労働生産性と実質経済成長を上回るベアはインフレを招きよくない。ガイドライン設定についてもこれからだが、五、六%以内が適當」（九・一七、朝日）、又、ブルジョア組

の收拾は、社会党・総評指導部の無力さがない限り、労働者の貧困、生活苦からの解放はありえない。又、改良闘争においても、徹底して闘かわない限り労働者の収奪は、社会党・総評指導部の無力さをあらわにし、その反動性を明らかにしても、改めて闘争問題をめぐる鬱い

の收拾は、社会党・総評指導部の無力さ

をあらわにし、その反動性を明らかに

してある。

こうして、仲裁裁定問題をめぐる鬱い

の收拾は、社会党・総評指導部の無力さ

をあらわにし、その反動性を明らかに

してある。

路線は、その反動性が加速度的に強化されてゐる。労働者大衆を犠牲にしなければ利潤を獲得できない資本主義を打倒し

れないのである。

これが組合主義者・総評が有効な反撃

を組織することなく、逆に、「国民春闘」

という組合主義的政治闘争を対置するに

とどまつてことにより、独占資本は容易

に「実質賃金の切り下げ」を押し進める

ことに成功してきたのである。賃金闘争では満足に闘いえない総評の存在こそ、価の上昇分（政府見通しで八・八%）と独占資本の「賃金抑制策」を許してきたのである。

また、七五、七六春闘においてもJC者（総評がJC依存路線で闘うという反動的路線こそ、独占資本のみならず、ブルジヨア組合主義者の天池同盟会長に「は、民主的労働運動の勝利と把握すべきで、同盟はそのための重要な役割を果たし」と、自我自賃させるに至ったのである。

以上のような経過の中でうち出された「国民春闘共闘会議」の「社会的妥当性のある要求」とは、徹底して反動的ストライクである。これは、独占資本のカガイドライン（攻撃に反撃するのではなく屈服し、ブルジヨア組合主義者の「賃金自粛」論に追従し、賃上げ要求の作成過程から、理論面において要求額を切り縮めるものなのである。ブルジヨア組合主

義者は、「賃上げミニマム」を消費者物としているのに対して、これに、数%を上るものが、「国民春闘共闘会議」の要求であり、「社会的妥当性のある要求」は春闘の成果は期待できない」（一〇）。

更に、横枝が強調する「資本側が結束しているのに対し労働側が分裂していく」「闘い取る気もないことを明らかにしているのである。

「国民春闘共闘会議」は、口先では同盟・JCのストなし春闘を批判してきた。だが、彼らも又、先に見たようにストライクを打破し、要求実現のために「いったん打てない状況へ自らの日和見主義を強めている。にもかくわらず、JC主導型ノーマルクスの論争について」といふこと、つまり、ブルジヨアジーとプロレタリアートの対立をあいまいにするため、「制度闘争」を強調しているのである。

横枝は、「国民春闘」というように、「労働運動は賃上げだけでなく、政策・制度闘争」は、賃金の補完をすることも出きないばかりか、インフレ・不況の諸矛盾が労働者に転嫁されている中で、資本主義を美化する反動的役割を果たす以外の何ものでもない。

第二に、「制度闘争」に関して、総評

共闘委は、今春闘で「制度的要求」実現に向け二波にわたるストを打った。しかし、何も具体的な成果を引き出すことはできなかつた。今秋期闘争は、「減税」要求などで政府への陳情を行う闘い（？）が「制度闘争」であつた。この「制度闘争」においては、同盟、そして「政策推進労組会議」との相違が全くない。「制度闘争」は、賃金の補完をすることも出きないばかりか、インフレ・不況の諸矛盾が労働者に転嫁されている中で、資本主義を美化する反動的役割を果たす以外の何ものでもない。

彼らは、「賃金労働者の大衆は終身賃金労働のうきめにあっており、近代の大企業がすべての生産部門をますますわがものとするにつれ、賃金労働者と資本家のあいだの懸隔はいよいよ深く広くなる。だが、ブレンターノ氏は賃金奴隸をできるものなら満足している賃金奴隸にしておきたかったから、それで彼は、労働者保護、職業組合の抵抗、くだらぬ社会立法その他を誇張してすばらしいものにせ

ざるをえない」（エンゲルス「ブレンターノ対マルクスの論争について」）といふこと、つまり、ブルジヨアジーとプロレタリアートの対立をあいまいにするため、「制度闘争」を強調しているのである。

横枝は、「政治の流れを変える」とまで言ひだした。賃上げは「生活弱者」に痛手となり、社会不公平の拡大につながる（桜田）といふ獨占資本の攻撃に何等反撃できなかつた彼らは、「制度的要求」で対抗した。そして、この「制度的要求」の実現は、「政治の流れを変え」ることが必要であると発展して

第三に、「制度闘争」について、総評

は、大言壯語していた。要求作成過程か

ちくさい要求さえ真に闘い取ろうという意欲もない総評は、かくして、「制度闘争」に逃亡するのである。

「制度闘争」の破綻と二月総選挙

進展する反動的

労線統一の動き

総評のブルジョア組合主義への追従が強まっている中で、一〇月七日、ブルジョア組合主義を軸とする民間大連産の「政策推進労組会議」が発足した。

代表世話人である堅山電気労連委員長

が、「政策・制度要求ばかりでなく、貨金闘争にも取り組みたい」「民間の大結集をはかり、将来の労働戦線統一にも貢献したい」と言っている様に、すでに、「政策推進」を共通の課題として取り組み出している。そして、総選挙後か、来春の参院選の結果によつては、民間大連合、新たなナショナルセントラルもありえりし、それをを目指して総選挙を闘い抜く

宮田鉄鋼労連委員長は、「私は頑固な反共主義者。鉄鋼労連は総評加盟組合だが、大手五社労組は総選挙で、民社を推して闘う」、又、柳沢造船重機委員長も

「民主主義の崩壊は、左の全体主義に道

るのだ！

を開く。それを阻止するためにも民社を拡大させねばならない」へ造船重機第六

定期大会」と述べ、民社の党勢拡大を願望している。このことは、労働戦線で

政策推進労組会議」は、その手初めなのである。

同盟・JCを軸とする「政策推進労組会議」は、労資一体の運動（？）をより一層押し進めるであろう。それは、造船重機の運動方針「兵器を国産化せよ」を見ても明らかである。この労資一体

に立つて「国産化は至上命懸」へ

の要求は、憶面をなく「完全雇用」「

最小限の戸締まり防衛は必要」との立場

によるブルジョア組合主義者の策動は、

資本主義の危機の中で、政府・自民党の

「五年体制」の崩壊が進行しているそ

に帰着するであろう。「政策推進労組会

議」は、そのような反動的組織に向けた

理等は、必然的にこのような反動的結論

に帰着するであろう。「政策推進労組会

タイ反革命クーデター弾劾

タイ人民はくじけない

生を中心打ち倒した、学生革命三周年

十月一四日を八日後にひかえた十月六日

未明のことだった。

タノム帰國以降、クーデターに至る全

過程は、きわめて周到に準備され計画されれたものに他ならない。タノム及びそれ

トラー（暴君）タノムの突然の帰

国によつてもたらされた、タイ全国学生

センタ（NSCCT）全国労働者連絡

人民と、軍部及び、軍部と密接つながりを持った右翼団体との対立は、タイに再び軍部クーデターを引き起してしまつた。おりしも時は、タノム軍事独裁を学

りをきめこんだのである。こうしたタノム帰国をめぐる軍、警一体となつた迅速な後押しさ、タノムの帰国が、彼らのいうような突如としておきた親孝行心でもなければ、個人的意志によるものでもないことを示している。

これに対して、タノム独裁政権を打倒する原動力となつた全国学生センターを中心とした、労働會議（FGT）を中心とするタイ人民は、即座にタノム追放の大衆闘争を全国で展開した。NSCT、N WCC、FGTによるバンコク旧王宮前広場における一万をこす無期限集会、マサート大学での無期限ろり城を始めとして、北部チエンマイ、東北部ウボンなど全国でタノム追放の闘争が展開された。

このようなタイ人民の闘いに対して、軍部反動派は、国内治安作戦司令部の青年を指導部とする、反革命テロ部隊「赤い野牛」「九つの新しい力」などを使つて武装襲撃をくり返させ、六日未明、タマサート大学にたてこもるNSCT、FGTの労働者、学生を、見る者の眼を被

いたくなるような残虐なやり方で武装鎮圧し、同時に首相官邸を包囲し、クーデターを行つたのである。

こうして行なわれたクーデターは、東南アジア唯一の議会制民主主義国を、再暗黒の圧政の國へと變えてしまつた。

このクーデターが、インドシナでの民族解放勢力の歴史的勝利による革命的情勢

と、一方では、民主主義下でのタイ労働者、人民による階級闘争の發展に恐怖し、

たブルジョアジー及び軍部の反動的まき

返しであることはもとより、さらに東南

アジアの新植民地支配の維持に、大きな

政治的、経済的利害をもつ、日米両帝国

主義者のきわめて悪徳な陰謀であるこ

ともまた明らかである。

成立した軍事政権は、王制の護持、反共産主義を旗印に、十号に及ぶ布告を明解散、結社、集会の禁止、出版、言論の自由の禁止、反共法の強化、ストライキの禁止等を骨子にした、こうした一連の布告は「民主主義は一六年かけて、四年

と農民は、十・一四学生革命以後、ブルジョア・ジャーナリストをして「タイの人々は変った」といわしめる程に政治的意識は高まり、階級的自我、階級的團結は強まつた。労働者の争議件数を見ても、おとしこめられた、タイ労働者階級と農民は、十・一四学生革命以後、ブルジョア・ジャーナリストをして「タイの人々は変った」といわしめる程に政治的意識は高まり、階級的自我、階級的團結は強まつた。労働者の争議件数を見ても、七二年には二五件であったものが、七三年には五三三件、そして七四年には三五件であった。

七・四 学 生 革 命 と 階 級 斗 争 の 発 展

サーム、トララート（三暴君）タノム・アーバート、ナロン軍事独占体制下で

一切の政治的自由を奪われ、革命的思想

にふれる機会を奪われ、ねむれる羊へと

おとしこめられた、タイ労働者階級

と農民は、十・一四学生革命以後、ブルジョア・ジャーナリストをして「タイの人々は変った」といわしめる程に政治的意識は高まり、階級的自我、階級的團結は強まつた。労働者の争議件数を見ても、七二年には二五件であったものが、七三年には五三三件、そして七四年には三五件であった。

こうした労働者階級の闘争の發展に対する、サンヤ政権は、口先では、裁判の平等、民主化、税制の改革など民主化を強調しながら「タイ労働者は、仏教徒の非暴力主義に従つて行動してほしい」とスト中止を呼びかけ、労働者階級に全般的に敵対し、自らがブルジョアジー、地主の代表者であることをさらけだした。

こうした、新植民地支配体制のインド

シナでの崩壊は、帝国主義にニヤ着してい

た買弁ブルジョアジー、地主、封建階級

などの支配階級をして、きわめて深刻な

パニック状態を引きおこさしめた。この

事はインドシナ三国に隣接し、アメリカ

帝国主義の後方基地として、一貫してイ

ンドシナ侵略に手をかしてきていたタイの支

配階級にはとりわけそうだったのである。

印度シナ人民の勝利によつて直接は

引き起された東南アジアにおける新植

軍事政権が、日米帝国主義の意向をうけた、タノム・アーバート体制にも比すべく、売国的人民虐殺体制であることを示

づつ四段階にわけて実現する」などといつたペナン的言辞にもかかわらず、この

對立がきわめ、決定的になる中で、タイ

20

民地支配の動搖は、アメリカ帝国主義、及び日本帝国主義にとつて死命を制する政治的危機に他ならなかつた。既に「健全な發展をする余地を残さない程莫大な生産力の發展と過剰資本を蓄積してきた帝國主義にとつて、インフレ政策と新植民地支配による過剩利潤によつて、不斷に噴出しようとする過剩生産恐慌をくりのべにしてきたのである。人為的に延命されてきた帝國主義にとつて、この新植民地支配は不可欠の要素に他ならなかつたのであり、こうした帝國主義の寄生性と腐朽性は露羅的に大きくなつていたのである。

アメリカ帝國主義は、この新植民地支配の危機に対して、マヤガエス事件による強引な力の誇示によつてまきかえしを計つた。しかし支配の危機には階級闘争の發展が見合うものである。タイを後方基地としたこの作戦に対して、NSCOTを中心とするタイ人民は「アメリカによるタイの主権侵害」に抗議する大集会をアメリカ大使館前で組織し、街頭にはデ

モ隊があふれた。そしてサンヤ政権は、こうしたタイ人民の闘いの前に米軍基地の全面撤去を求めるをえなかつたのである。

またインドシナ・ショックに伴なう政

治的動搖は、タイ経済にも深刻な危機をもたらした。階級闘争の高揚に対し、サンヤ政権は何一つ有効な統治能力を持たなかつたし、また持ちえるはずもなかつた。こうした情況の中で、政府、民間

を含めた財政援助、資本投下は激減し少すると同時に、戰後最大の不況がタイに經濟をもぎこんだのである。

対政府借款、外國資本に全面的に依存して六〇年代の十年間には、八・一%と

いう高成長で工業化を進めてきたタイに

とって、この事は經濟の崩壊的危機を意味していた。レイオフは恒常化し、失業率は5%をこえるまでになるとともに、

労働者階級と農民をはじめとした被抑圧階級は、きわめて劣悪な生活状態に陥りこめられてきたのである。

民主化のかけ声とは裏腹に、一向に農地

の開拓が進まなかった。こうした農民の要求をうけいれないと知

るや、この約十万の農民は、政府発行の身分証明書をやきそて、七四年末にはタイ農民連合を組織し、地主階級とその代弁者たる政府に対する闘いを強固に展開し始めたのである。

民主主義の幻想と

階級闘争の内戦的發展

こうした階級闘争の高揚は、七五年初めの総選挙において、社会主義党、統一社会主義戦線党などの左翼が三七議席を獲得せしめた。しかし第一党となつた民主党でさえ二六九議席中、七一議席と、単独与党を占めることができず、社会農民党など、タノム軍事政権下の軍部と直接のつながりをもつ反動派との連立政権をくむことにより発足したセニ内閣は左翼においこまれ、社会行動党主、実弟ククリットに首相の座を譲り渡したのである。

この約十万の農民は、政府発行の身分証明書をやきそて、七四年末にはタイ農民連合を組織し、地主階級とその代弁者たる政府に対する闘いを強固に展開し始めたのである。

この買弁ブルジョアジーと地主階級の代弁者クラクリット政権は、経済政策においても、それらの意向を反映していた。クラクリットはタイ経済の破綻を、外国人職業法、外国人労働法その他投資原則の緩和などによつて対政府開発資金援助、よい工業化が国民經濟の成長と無関係にある。しかしタイ經濟の破綻が、新植民地支配の下で、帝國主義にとつて都合のいい工業化が国民經濟の成長と無関係に成されないまま、外國資本による工業化おし進められ、資本主義的国内市场が形成されないまま、外國資本による工業化と、それを軸にした輸出入經濟への全面的依存と隸属によつて引き起こされたも

改革を行なわないサンヤ政権の下で、農民は借金のカタに農地を奪われ、小作農は雇用のカタに農地を奪われるをえなかつた。農村労働者化し、耕作地の約四一%は借地となつたのである。

こうした中で、都市労働者は全面的な闘争に立ちあがらざるをえなかつた。七年六月、織維労働者は、最低賃金引き上げ、操短とともに首切り反対、退職

金引き上げ、などの要求をかかげて、一年間に及ぶストライキを打ち抜き、また

ある外資系ジーンズ工場では、NSCOT、NWOC、FOILの支援の下で、右翼団体による武装襲撃をハネ返して、工場の

主導管理、自主生産を行なうまでに至ったのである。

一方、農民はといえども、五月、地主が不當に握っている担保物件の土地返還、農産物の生産者価格の引き上げ、土地の貸借に対する政府の統制を要求し、北部四県から、首都バンコクに向か、約十万人の農民がデモをかけ、メーデーの労働者学生と合流したのである。サンヤ政権が

こうした農民の要求をうけいれないと知

のである以上、この新植民地支配をさらにも強めるべくこうした外資依存型經濟が、タイ經濟の破綻を救うるはずもない。この結果は、タクム、プラバート及びナロンの資産処分問題で明るみにだされたように(ナロンなどは、たかだか大尉に数億円の金をためこんでいた)帝國主義に自国の政治と經濟を売り渡し、労働者階級と農民からしぼり取った利益のおこぼれを頂だいする事による買弁ブルジョアジー、地主、カイライ政治家の私腹が肥えるだけであり、一方では、労働者階級と農民の収奪と搾取のあぐくの生活破綻と疲弊に他ならないのである。

こうしてクラクリット政権は、壳国の政策を開拓する一方、労働者階級と農民に対する、反動的対応を開拓したのである。反革命売国奴は反共宣伝をくり返す一方、「赤い野牛」「九つの新しい力」といって、国軍、警察の外郭団体ともいはべき反革命テロ部隊を使って、警察の黙認の下

で、農民連合指導者の暗殺をはじめ、革命的人民に対する武装襲撃を全面的に展開したのである。この反革命武装襲撃が頂点に達したのが、七五年一月に行なわれた第二回の総選挙に伴う選挙戦に他ならない。反革命テロ部隊は、自由主義的候補を含めた左翼に対して、徹底した武装テロをくり返し、選挙戦はこうした反革命テロに対する武装なしには行なう事ができない状態になつた。社会党書記長ブンサン・ブンヨーダイン、NSCTの指導部の人、アムレス・チャイサ・アードを始めとする四〇名にものぼる反政府運動の指導者が暗殺された。こうした白色テロの犯人は、一度として逮捕され事なく、こうして政府に公認されるのである。

選挙の結果は、前回三七議席を獲得した社会党、統一社会主義戦線党などの左派陣営は、三議席しか獲得することができなかつた。このことは反革命完國奴どもの反共宣伝が功を奏したからでは決してないし、革命的人民の闘いが封じこめ

られた結果でもありえない。事態はむしろ逆である。

投票率二〇一二五%前後という、まったく低い投票率が示すように、階級闘争の発展が、タイ労働者階級と被抑圧人民の爆弾襲撃が警察の黙認のまま通り過ぎるならば、私はこれまでと違う闘争形態をとらざるを得ない。私は非合法活動にて演説していたNSCT委員長キニカルモ・ラオバイロジエに向つて投石が「赤い野牛」によつて行なわれた時、彼は、「タイのどこででもこれ以上右翼をとらざるを得ない。私は非合法活動にて入る」と宣言したし、社会党内では多くの有力な指導メンバーが従来の路線に不満を表明した事が伝えられている。タノム軍事独裁体制打倒以降の議会制度によるならば、私はこれまでと違なれたのである。

うであるように、タイにおいても経済援助、民間資本輸出においてアメリカを抜き第一位国へとのしあがつてゐる。一九七四年一二月現在、政府開発援助一七四〇万ドル、資本投下七五五〇万ドルとその額はきわめて莫大である。アメリカ帝國主義は、同一八一〇万ドル、二六五〇万ドルである。兩帝國主義の合計額は、また輸出入においても七四年、対日輸出六三一万ドル、輸入九八七万ドルと第一位国の座を占めており、織維工業、自動車組立て、工業などを中心に約二三〇社が進出しており、タイの外資系企業のほぼ四割を占め、金融資本も東京銀行、三井銀行が外国銀行の一位、二位を占めており、他の帝国主義をひきはなして、タイ経済を全面的に支配しているのである。

日本帝国主義は、東南アジア諸国でそれをもろ手をあげて表明した。

このようないずれの階級闘争の発展の中を行なわれた反革命クーデターは、日米帝國主義の後押しの下で行なわれたものに他ならない。日帝はクーデターの直後に、この反革命政権を承認する用意のことと日本帝国主義は、東南アジア諸国でそれをもろ手をあげて表明した。

投票率二〇一二五%前後といいうまつた。この発展が、タイ労働者階級と被抑圧人民の爆弾襲撃が、タイ人民の武装勢力は、地方に不満を表明した事が伝えられている。タノム軍事独裁体制打倒以降の議会制度によるならば、私はこれまでと違なれたのである。

問題は、貢弁ブルジョアジー、地主階級がタイの政治と経済を、被抑圧人民を帝國主義に売り渡すことによつて、私腹を肥やしている新植民地支配にあまんじるのか、これを打倒し、眞の民族的自立を求めて決起するのか、として存在しているのである。

タイ共産党は「タイ人民の声」放送において「タイ人民の武装勢力は、地方に反動的に敵対した。そしてタイ進出の日帝ブルジョアジーは国内政治の不安定、インドシナ変化に伴うリスク増、労働情勢の不安などをうつたえ、露骨に独裁支配のぞんでいたのである。(バンコク日本人商工会議所の景気調査)

「東南アジアの開発途上国では、民主制から独裁制への移行は、少なくとも経済発展という尺度でみるとかぎり、明らかに進歩」(十一・一四朝日、タイ進出資本家の発言)という、日帝ブルジョアジーの喝采は、このクーデターが日米両帝国主義の支援と後盾のもとに完國的支配階級と軍部によつて行なわれた悪辣な陰謀であることを物語つてゐる。

クーデターは民族解放の出発点である

米國帝國主義の望むよろな新植民地支配

なレベル」に達している。

を維持することができないのは明らかである。

十一・四学生革命以後、三年間の経験はタイ人民にとってきわめて決定的である。軍事独裁を倒しても、あいだらす帝国主義の強奪取と強収奪の下での生活ひつ迫、貧困はなにも解決されなかつた。

農民は地主に高い小作料をはらわなければ農耕を行なうことはできない。政府は壊国的性格を持ち続けた。労働者と農民の闘いには、警察公認の反革命テロ部隊の武装襲撃が加えられた。

ベトナムの経験が有弁に物語るように新植民地支配下で政治的・經濟的自立、民族解放と労働者階級の解放は、何よりも帝国主義とそのカイライである反動勢力との徹底した闘争以外に道のないこととを、タイ人民は自らの経験によって理解したのである。

政府側の発表によると、多くの左翼活動家が非合法の共産党に組織し、武装闘争に参加しており、その数は「そうとういる不安は、当然すぎる程当然である。

過剰資本をかかえた資本主義は、國家銀行信用供与によって過剰生産恐慌をくり延べにしてきた。こうして過剰生産恐慌の買いささえためにはらわれた赤字財政、公債発行は、必然的にインフレーションを呼び起さざるをえなかつた。このインフレーションは、一方では独占価格によって独占資本に超過利潤をもたらしたが、他方「生産と消費の矛盾」を深めさせ、労働者大衆の消費水準を低下させ、更に、商品輸出、資本輸出の増大によって、このような矛盾を乗り切らんとしたのである。また、増加した貨幣資本は、インフレーションの中で生産の拡大したのである。また、増加した貨幣資本は、インフレーションの中でも生産の拡大を行なうことはできない。政府は

三年間の階級闘争の發展と経験はタイの労働者と農民にきわめて多くのことをおしえた。帝国主義とカイライ政府との闘争は、自らの解放が革命的武技によつた。

十月上旬、マニラで行なわれた一連の国際通貨会議は、米国、西独、日本といつた黒字国と、英國、フランス、イタリアといつた赤字国との間の、國際收支不均衡の著しい拡大と、そりしたことと結びついた、英ポンドの大暴落、イタリアリラの暴落といった通貨危機の中で行なわれた。こうした情勢に規定されて、この一連の通貨会議の焦点は、このところの格差の広がる一方の國際收支赤字国と黒字国との間の調整問題、國內經濟の今後の運営、IMF協定改定後の市場介入原則の確立などの問題が、きわめてシビアな

市場再分割と利権間の対立

IMF年次報告

十月中旬、マニラで行なわれた一連の国際通貨会議は、米国、西独、日本といつた黒字国と、英國、フランス、イタリアといつた赤字国との間の、國際收支不均衡の著しい拡大と、そりしたことと結びついた、英ポンドの大暴落、イタリアリラの暴落といった通貨危機の中で行なわれた。こうした情勢に規定されて、この一連の通貨会議の焦点は、このところの格差の広がる一方の國際收支赤字国と黒

字国との間の調整問題、國內經濟の今後の運営、IMF協定改定後の市場介入原則の確立などの問題が、きわめてシビアな

これに先きだつて発表された、IMF七年度年次報告は「失業率、物価上昇率とも、景気上昇初期の段階としては、異常な高水準にとどまつてゐる。先進国の需要、生産は遊休設備や失業を吸収する程、急速には増大していない。景気の

拡大は新たな物価上昇の懸念を抱かせてきたたせ、危機を深めさせたのである。これを鉄鋼の代表的輸出品である冷延うす板みると、中南米市場における日、歐製品の市場占有率（シェア）は、七三、八四年にはEC製品が二三%で、日本製品が七八%であったものが、七六年上半期には、ECが八%にすぎず、日本は九二%にもハネ上っている。米国市場でも、七

七年にはECが五四%、日本が四六%で二〇%、日本が八〇%と逆転してしまつた。年次報告の述べる「黒字国と赤字国との間の利害対立を伴つたものとして煮詰まつたのである。

このようないくつかの問題が、七年度年次報告に突入した結果に他ならないのであつて、不均等發展の法則の貫く帝国主義にあつては、強い帝国主義、米国、西独、イギリス、イタリアなどの間での國際收支の不均衡の拡大は、また英ポンド、イタリ

利害対立を伴つたものとして煮詰まつたのである。新たなる民族解放闘争の出発点となるにちがいない。

このようないくつかの問題が、七年度年次報告に突入した結果に他ならないのである。新たなる民族解放闘争の出発点となるにちがいない。

業者が無利子で中央銀行に担保金を入れなければならぬ措置をとり、スペインもまた輸入課徴金制度を導入している。

カナダは、衣類についての来年の輸入を今年の半分以下に制限しようとしており、米日はカナダからの牛肉輸入を削減し、フィリピンからの砂糖の関税を引き上げている。また米国は、ECから大豆、食用油、トリ肉などの輸入制限攻勢にあり、逆に欧州から食品の輸入制限で報復しようとしている。

保護貿易主義の台頭は、世界的に形成されざる過剰資本の処理をめぐって行なわれる市場再分割戦の激化、角逐の結果、こうした独占対独占の闘い、競争の中で、行ない、そうした事を可能にするために国内では独占的高価格で売るために、国内外市場を保護する結果、ひき起こされるものであるが、一方では、「弱い」帝國主義の通貨の下落、通貨危機が引き金になっているのである。ポンド、リラの下落は、この両国の経済が、こうした競

争に勝つ事ができない、せい弱なもので

あることからくる、国際金融資本の両通貨からの逃避に他ならない。そしてポンティラへの売りの集中、下落は、原材料

争に勝つ事ができない、せい弱なもので、相場の安定を破壊するものである。こうした矛盾した資本の行動は、しかし資本の自己増殖を規定的・推進的動機とする個々の資本にとっては本能的なものである。

サンフラン会議から、今回の IMF・世銀総会を通じて、開放貿易の維持、為替相場の安定化を「国際協力」として、

ちかいあつてきたにもかかわらず、こうしたかけ声とは裏腹に、保護貿易主義の台頭と通貨危機の激化は、まがりなりに

本を赤字財政、公債発行など、銀行信用供与、インフレ政策で支えてきた、国家

も生産の拡大を通じた経済の発展といつた、不況からの自律的回復がもはや不可

能な程、資本主義は、腐朽性と寄生性を強めていることを示しているのである。

30 つて利潤追求をはかる資本にとって必要

な、相場の安定を破壊するものである。

貨物をはじめとする輸入品が高くなる事を意味し、インフレはさらに高進するのであ

る。

この通貨危機はある通貨への売りの集中から起ころるものに他ならない。過剰資本を赤字財政、公債発行など、銀行信用供与、インフレ政策で支えてきた、国家

をはじめとする輸入品が高くなる事を意味し、インフレはさらに高進するのであ

る。

この相場変動を利用して利潤を引き出そ

うとする投機的性格を持つようになるの

である。こうした国際金融資本の行動は

一方では、生産と流通の円滑な発展によ

どのようににして「第二次ブント総括(6)

目次

次

はじめに

第一章 第一期(六一—六六年) 関西ブントの思想形成

(六・七月号まで)

第二章

第一部 ゲオルグ・ルカーチ批判

はじめに

ヘイソルカーチの世界観

(1) ルカーチと歴史的状況

(2) 協証法における總体性の契機

(3) 物象化と階級意識

① 物象化と除外された労働について

② 物象化とプロレタリアートの意識について

- (4) ルカーチの自然弁証法批判
- (5) ルカーチの反映論批判
- (6) コミニテルンのルカーチ批判と自己批判
- (7) ルカーチの政治的性格
- (8) ルカーチの略歴
- (9) 空想的社会主义観
- (10) 急進的戦術左翼
- (11) ルカーチの自己批判

- 第三章 第二期(六六—六九年) 関西ブントの実践過程
- 第四章 ブハーリン、ローヴィ批判
- 第五章 第三期(六九年—) 関西ブントの思想的、実践的分解

(3) 物象化と階級意識

経体性のカテゴリーを主要な要素とする弁証法をもつて現実世界を認識するところが、その変更可能性を証明することであり、それこそがマルクス主義の革命的性格をなすものなのだとするルカーチは、では、一体いかなる内容において現実世界の変革をとらえていたのであらうか。

ルカーチはそれを『歴史と階級意識』中の「物象化とプロレタリアートの意識」の項において展開している。しかし、それは、先に指摘した弁証法的唯物論の弁

証法の側面を強調するのみで、唯物論的側面をまったく顧みないという誤ばかり。

分析的実証科学を否定し総合的方法をのみ問題とする誤まり³事物そのものの矛盾の具体的な相互関係ではなく、事物の総体的相互関係にのみ注目するという誤まりによつて、きわめて空疎な、どちらかといふと現象論的社会学に近いものとなつてゐる。

とにおいてだけでなく、労働の内容自体が人間にとつて疎遠になることにおいて、あらわれてくる。「資本主義的分業は、一方において、「労働過程が……部分作業に分散され、……労働が……専門機能に変形され」、他方において、「合理的機械化が……労働者の「魂」にまでいくこんてきて……労働者の心理学的特性さえも……客体化」する。この結果「生産物の有機的な生産の仕方」、すなわち伝統的経験的結びつきをもう労働の体験に基づく生産の仕方は解消され、「労働者の活動はますます、その活動性を失い静観的な態度に陥るのである。それは、労働者をして、「傍観者」たらしめることであり、「機械的生産の際には個々の労働主体を一つの共同体と結びつけていた絆帶を引き裂く」ことに他ならない。要するに、現代社会の物象化とは、「人間的関係をはつきりと示す自然に生じてきた諸関係のなかわりに、合理的に物象化された諸関係をおくる」ことなのである。それは、社会

ここにおいてルカーチは、自分がまるで生粹のヘーゲル門徒に他ならず、マルクス主義への接近も新カント派的内容に

が、その厳格な見せかけ上は完結した合理的な独自の法則の中にみずから根源的本質である人間関係のすべての痕跡を隠しているということである。

タス主義への接近も新カント派的内容においてにすぎないことを暴露せざるをえないはめに陥つてゐる。ルカーチの哲学

的 세계觀の別の側面からの検討にうつる前に、ここで物象化と階級意識の諸項目を概略し、それに簡単な批判的コメントを加えておこう。

(イ) 物象化と疎外された労働について

ルカーチは、「物象化の現象」において、例の物象化一疎外論を次の様に述べている。そもそも物象化の本質とは何であろうか。

「商品構造の本質は、人間と人間との関わり合い、関係が、物象化という性格をもち、こうしてまた幻滅的な対象性」

が、本問題」としてとらえなければならぬ。この物象化は、いかなる現実を生起するであろうか。「この物象化の基本事実によつて、人間独自の活動が、人間独自の勞働が、なにか客体的なもの、人間から独立しているもの、人間には疎遠なる諸問題」に他ならないからである。^{3.2}に、「商品構造の物神化」の中にこそ、資本主義の全貌がやどされているのだ。

この物象化は、いかなる現実を生起するであろうか。「この物象化の基本事実によつて、人間独自の活動が、人間独自の勞働が、なにか客体的なもの、人間から独立しているもの、人間には疎遠なる諸問題」に他ならないからである。^{3.2}に、「商品構造の物神化」の中にこそ、資本主義の全貌がやどされているのだ。

の全領域をのみこんでしまつてゐる。ある。……商品形態は、また、それが以上が、ルカーチの物象化論の要約であるが、商品構造の物象化に資本主義の存立と没落の鍵があるとする点へこの点の誤まりは後述)を別にして、この見解の最大の誤まりは、労働の疎外が、商品の物神的性質、商品構造の物象化から生じると論ぜられてゐることである。これは、個々の要因を十把ひとからげに連鎖づけんとする粗雑な総合的誤点だといわねばならない。

マルクスは「資本論」において「商品の物神的性質とその秘密」の中で次のよ

のは、單に次の点にある、——というの、商品形態は、人間自身の労働の社会的諸属性を、労働生産物そのものの対象的諸属性を、労働生産物そのものの対象的諸属性として、人間の眼に反映させ、確認した上で、価値法則にたいするアル

ジニア科学の無能ぶりによれ。資本主義

の性質として、これらの諸物の社会的な

自然諸属性として、人間の眼に反映させ、確認した上で、価値法則にたいするアル

ジニア科学の無能ぶりによれ。資本主義

「経哲草稿」においてマルクスは、労働の疎外を次のように四つの側面から分析している。

「①労働者にたいして力をもつ疎遠な対象としての労働の生産物にたいする労働者の関係。②労働の内部における生産行為にたいする労働の関係。③人間の類的生存をすなわち自然をも人間の精神的な類的能力であるのに對し、これ(④)は自己疎外である。④人間の類的存在をすなわち自然をも人間の精神的な類的能力をも、彼にとつて疎遠な本質とし、彼の個人的生存の手段としてしまう。」

これに續いてマルクスは、「われわれはこの事実へ國民経済的事実のこと」の概念を、疎外された、外化された労働と表現してきた。われわれはこの概念を分析してきたのであり、したがつてたんに一つの国民経済的事実を分析してきたにすぎないのである。

さてわれわれはさらに、疎外された、外化された労働といふ概念が、現実にお

が明らかにされるが、これは本論に直接關係ないのであつておく。
労働の疎外は、全社会的な商品生産を土台として、生産における所有、労働における支配という資労働と資本關係から生みだされるのであって、ルカーチのよう、商品の物神的性格、商品形態の物象化から生起するということはできない。したがつて、ルカーチは論理的にも現実的にも直接の關係にない要素を没概念的に結びつける誤まりを犯しているだけなく、そのことによって後にみると、疎外された労働の解放＝商品の物神性、商品形態の物象化の打破とすることによって、所有と支配をめぐって現実的に闘われる階級闘争を具体的に对象化できなくなってしまうのである。

(四) 物象化とプロレタリアートの意識について

ついで、ルカーチは、この「物象化された現実」をプロレタリアートがいかに

いてはどのように表現され述されなければならぬかをみるとよ」と課題を設けた後で、「実践的な現実的

疎外を生ずる媒介は、それ自体実践的なものである」として、「こうして労働の表現されることがある。それを通じて疎外された、外化された労働を通して、労働にとつて疎遠な、そして労働の外部に立つ人間の、この労働にたいす

る関係を生み出す。したがつて私有財産は、外化された労働の、すなわち一方で自分自身にたいする外的関係の、產物であり、成果であり、必然的帰結なのである。

それゆえ私有財産は、外化された労働、すなわち外化された人間、疎外された労働、疎外された生活、疎外された人間といふ概念から、分析を通じて明らかにされるのである。

たしかにわれわれは、外化された労働（外化された生活）という概念を、私有財産の発展の頂点にきてはじめて、

それが外化された労働の根柢、原因として現われるとしても、むしろ外化された労働の一帰結にはかならないことが明らかになる。のちになってこの関係は、相

互作用へと変化するのである。

私有財産の発展の頂点にきてはじめて、

マルクスは、疎外された労働、外化された労働の、すなわち一方で

自分自身に立つ人間の、この労働にたいす

る関係を生み出す。したがつて私有財産

として、労働にとつて疎遠な、そして労働の外部に立つ人間の、この労働にたいす

る関係を生み出す。したがつて私有財産

として現われるとしても、むしろ外化された労働の一帰結にはかならないことが明ら

かになる。のちになってこの関係は、相

互作用へと変化するのである。

これが外化された労働の根柢、原因として現われるとしても、むしろ外化された労働の一帰結にはかならないことが明らかになる。のちになってこの関係は、相

互作用へと変化するのである。

それが外化された労働の根柢、原因として現われるとしても、むしろ外化された労働の一帰結にはかならないことが明らかになる。のちになってこの関係は、相

互作用へと変化するのである。

これが外化された労働の根柢、原因として現われるとしても、むしろ外化された労働の一帰結にはかならないことが明らかになる。のちになってこの関係は、相

互作用へと変化するのである。

は成果であるというより受けとられる。

こうした見せかけは、資本家には眞の実を隠蔽するのであるが、この見せかけの行動が内部ではだらく余地をもつてない労働者にとっては、自分の主体分裂状態、すなわち一傾向として——無制限な奴隸化という残酷な形態をとるのである。……

だが、まさにこのことによつて、労働者はこの物象化された状態の直接性を乗り越えるのである」

労働者が、この直接性をのりこえることによって事態は次のようになる。「労働者は、自分自身を商品として意識するときのみ、自分の社会的存在を意識することができる。労働者の直接的 existence は労働者を、生産過程内部での純粋な客体という位置につける。だが、この直接性が、多面的な媒介の結果であることが証明され、この直接性的前提となるものがすべて明白になりはじめるとともに、商品構造の物精神的形態が崩壊しはじめる。したがつて、労働者がこの客体としての

物論全体が、すなわち資本主義社会の認識としてのプロレタリアートの自己意識

全体へおよび資本主義社会への諸段階としての従来の諸社会の認識)がひそんでいるのだ、ということができるであろう」

したがつて、今までのことをいいかえると、「資本主義社会の認識としてのプロレタリアートの自己認識」を表示してくれる史的唯物論(すなわち商品の神性を論じた部分)をプロレタリアートが自己のものとすることができる。プロレタリアートは、「かれら特有の階級状態の弁証法によって」これを実現するとはいえ、やはり「人間の全人格から切りはなされた活動が商品化することによって可能となる。

プロレタリアートは、「かかれ特有の階級状態の弁証法によって」これを実現するといふ特性以上のものを内に秘めていいることによってこの問題を解決できうるのである。

役割を克服することがまだ実質的に不可能であるかぎり、かれの意識は商品の自己意識である。いいかえれば、商品流通にもとづく資本主義社会の自己認識であり、自己開示なのである。

労働者が、自己の眼前にたちはだかる法則性をもつた複雑的世界の眞の秘密を認識することによって、この世界は必ずしも日々実践的に充満されざるをえない。労働者のなかよりも多く認識は次のことによつて一層確実なものとなる。「労働者が自分を商品として認識することは、認識としてはすでに実践的である。すなわち、この認識は、その認識の対象的な構造的な変化をもたらすものである。商品としての労働」と同様に、資本主義の量的な交換の力、ゴリ一のなかに跡かたもなく消え去るのであるが、商品としての労働の本質は、その「使用価値」が商品としての労働の意識のなかで、またこの意識を通じて社会的現実のなかで自覚されることである。

以上のことから次のようにいえる。労働の特質は、この意識なしには絶対的外接のもとで一つの人間関係であり、そのことが明らかになると、労働力商品、最もつ労働力商品の特殊な対象性は、物

なる。「労働者が自分を商品として認識することは、認識としてはすでに実践的である。すなわち、あらゆる商品のそれぞのなかに、その核心である人間關係が社会發展の原動力としてあらわれるのだ。しかし、すなわち、労働者は意識をもつ存在することによって、直接性の認知を認識しうるのである。

以上のことをから次のようにいえる。労働者は、このように自己の定在に対抗して完全に自分を内面から客觀化できるのであるが、他面で官僚制度などのなかで

生きるために反抗を余儀なくされている。しかしながら、この「人間的・心的本質」をねむりこまることはないのである。したがつて、「物象化の構造が完

成する唯一の担い手であるはずのかれの器官もまた、物象化され機械化されて、商品となつてゐるのである。しかもそこで、かれの思想や感情などもその質的存続的性質についての章のなかに、実的唯物論

全に明瞭となり意識されうるようになるのは、プロレタリアートの労使関係の中においてである」ということができる。

以上が物象化された現実社会をプロレタリアートがのりこえることについてのルカーチの見解であるが、それは、法則的実体と意識的主体、存在と意識との弁証法的相互關係の解明という觀点によって貫れたものである。そして、それは、ルカーチがのりこえることについての

世界の眞の秘密をつかみしていく思想

みた唯物論と個別実証科学を否定する

とよつて現実世界の認識をきわめて表面的な現象的社會学としてしまつたよう

な変革の論理しか出てこないことを告白しているといわねばならない。

われわれは、ルカーチが客觀的真理を、人間はなぜ意識できるかという問題を、それは人間が意識をもつてゐる存在だから

らだといふ同義反復で回避していることや、感性的対象とその法則を認識する運動は、それ自体対象的実践以外にありえないことなどを理解していないことは問題とせず、ここで、彼が認識における論理的思考において、完全にマルクス主義から逸脱していることを明らかにしておこう。その前に、以上のルカーチの主張の中にある明白な誤った二つの見解を簡単にみておこう。

第一は、認識はすなわち実践である、との見解である。先の引用の中で、「この直接性が多面的な媒介の結果である」とが証明され、この直接性の前提となるものがすべて明白にはりはじめるとともに、「商品構造の物神的形態が崩壊はじめること」、「労働者が自己を商品として認識することは認識としてすべて実践的である。すなわち認識は、その認識の客体の対象的な構造的变化をもたらすものである」とかされているものがそれである。しかしこれは誤まっている。

マルクスは、「資本論」の「商品の物

歴史が、(原始状態は別として)階級闘争の歴史であったことこれらお互いに闘争する階級は、いつの場合もそれぞれの時代の生産関係及び交換関係の一言と言えば経済諸関係の產物である事、徒つとそれぞれの場合の社会の経済的構造こそ、それぞれの歴史的時期における全部構造、すなわち法律上及び政治上の制度、並びに宗教、哲学その他における考え方を終局において説明すべき実在的基礎をなしているという事であった」

経済学について、「問題はこの資本主義的生産様式について一方ではそれの歴史的関連ならびにそれが一定の歴史的時期にとって必然であることを、従つて、またその没落も必然であることを説明するとともに、また他方ではこれまでの批判が事柄自体の運び方よりも、むしろその悪い結果に向けられていたために、依然として正体を見せないでいたその内容的特質をあき出す事にあった。これは

神的性格とその秘密」において、価値原則が、「家が頭上にくずれ落ちるばあいの重力法則のようだ、規制的自然法則として暴力的に自己を貫徹するという科学的な洞見が経験そのものから生ずるためには、その前に完全に発展した商品生産が必要である」との唯物論的見解に統一して、「この秘密の看破は、労働生産物の価値の大いさの單に偶然的な規定という仮象を止揚するが、しかし決してかかる規定の物象的形態を止揚するものではない」とのべてある。認識することと止揚することとは別の問題なのである。

また、マルクスは、「聖家族」の中で、無理な相談である。さらにプロレタリアートの自己認識(?)を資本主義社会に「理念は、けつして古い形態をこえでるものもを実現することができない。理念を実現するには、実践的強力をもちいるのルカーチの非マルクス主義的な見解は、人間が必要である」とものべている。この観念についての反映論を否定する彼の存在と思考、理論と実践との同一性に基づくことは、言語道断である。

エンゲルスは、「反デューリング論」において、マルクスが歴史的理論と経済学においてうち立てた功績を次の様に評述する。「馬克思の歴史的唯物論について、「そこで明らかなことは、これがどのようにしておも彼が、それに對して支払ったよりも多くの価値をそれからとりもどすという事、そしてこの剩余価値こそが結局のところ価値総額をなすこと、これららの鍵が証明された。資本主義的生産と資本の生産、この両方のすじみちが説明されたのである。」

これらを総括したエンゲルスは、「この二つの偉大なる発見、すなわち唯物史的・唯心論を通じての資本主義的生産の秘密の暴露とは、われわれはマルクスにおうものである。これらの発見によつて社会主義は科学となつた。今やまず問題となるのは、あらゆる細部と連関にわたり、これがいかに全般的で革命的なものである」と結論づけている。

このように、エンゲルスによって要約された史的唯物論の内容を「資本論」の

神的性格とその秘密」において、価値原則が、「家が頭上にくずれ落ちるばあいの重力法則のようだ、規制的自然法則として暴力的に自己を貫徹するという科学的な洞見が経験そのものから生ずるためには、その前に完全に発展した商品生産が必要である」との唯物論的見解に統一して、「この秘密の看破は、労働生産物の価値の大いさの單に偶然的な規定という仮象を止揚するが、しかし決してかかる規定の物象的形態を止揚するものではない」とのべてある。認識することと止揚することとは別の問題なのである。

第二は、史的唯物論に関するものである。先の引用の中で、「商品の物神的性質についての章の中に、史的唯物論全体が明示されている。史的唯物論を商品のプロレタリアートの自己認識全体が

格についての章の中に、史的唯物論全体が、すなわち資本主義社会の認識として、カーチがいかに全般的で革命的なマルクスの世界觀と經濟理論を狭く理解したかが明示されている。史的唯物論を商品のプロレタリアートの自己認識全体が明示される。さらにプロレタリアートの自己認識(?)を資本主義社会に

おける商品形態の物神化の認識に狭める」とは、言語道断である。

エンゲルスは、「反デューリング論」においてうち立てた功績を次の様に評述する。「馬克思の歴史的唯物論について、「そこで明らかなことは、これがどのようにしておも彼が、それに對して支払ったよりも多くの価値をそれからとりもどすという事、そしてこの剩余価値こそが結局のところ価値総額をなすこと、これららの鍵が証明された。資本主義的生産と資本の生産、この両方のすじみちが説明されたのである。」

これらを総括したエンゲルスは、「この二つの偉大なる発見、すなわち唯物史的・唯心論を通じての資本主義的生産の秘密の暴露とは、われわれはマルクスにおうものである。これらの発見によつて社会主義は科学となつた。今やまず問題となるのは、あらゆる細部と連関にわたり、これがいかに全般的で革命的なものである」と結論づけている。

このように、エンゲルスによって要約された史的唯物論の内容を「資本論」においてこれを論証することはできない

のである。ルカーチが科学的社会主義の

理論であるマルクス主義をこのように歪めて、一面的にしか理解していかなかったことは、後でみると、彼の社会主義観が極めてユートピア的なものとなつたことの原因となつてゐるようである。

さて、本題にもどろう。

ルカーチは、プロレタリアートは物象化された社会的本質を生きるか死ぬか、という主体的な生の契機において、人間的本質の心的本質^ノという心地的契機において認識できるとのべている。これがルカーチの認識論的最大のよりどころなのである。しかし、これはマルクス主義的認識論からの全面的な逸脱である。われわれはここでは、人間が客觀的真理を認識する際の現実的過程（科学実験、産業、階級闘争）、すなわち実践を問題にしない。それは後で扱う。ここでは、真理に到る認識の論理的思考過程だけを問題とし、この点についてのルカーチの誤まりを明らかにしておこう。

マルクスは「資本論」第一版序文で、「経済的諸形態の分析にさいしては、頭が兩者にとって代わらなければならない」微鏡も試薬も役に立ちはしない。抽象力が両者にとって代わらなければならぬ」とのべている。この抽象力とは、「経済批判の序説」においてのべられた、「混屯とした表象^ノ表象された具體的なもの^ノから^ノもっと簡単な概念^ノ最も簡単な諸規定^ノへの下向、この逆の^ノ多^ノくの規定と関係をよくむ一つの豊かな總體^ノへの上向」という分析的、総合的思考をさしているのである。

すなわち、抽象力は、事物そのものの矛盾した連関しあう諸契機を把握し、その弁証法的発展過程を論理的に跡づけることによって、認識における真理への到達を保障するのである。これがマルクス主義における認識の思考過程である。

これにたいしてルカーチは、認識の契機、媒介として先にみた二つの要因をあげるのである。しかしそれは、事物、現象の本質をつかみとるための認識的思考にとつてまったく的はずれのものだといふべきである。後で、略歴の中であれるが、ルカーチは当時のドイツにおける新カント派から多大な理論的確証をくみとっているのであって、方法の問題に関してもいえば次のとくである。

当時、新カント学派の一人であったエミール・ラスウはハイデルベルグ大学のルカーチがさかんに哲学における方法を問題とし、自然科学においては弁証法的方法は適用できないとすることも、それが、ルカーチは當時のドイツにおける新カント派から多大な理論的確証をくみとっているのであって、方法の問題に関してもいえば次のとくである。

40

哲学教授としてルカーチにおしえをされたのであって、彼は唯物論は自然科学の方法であるかぎり正しいがそれが哲学的世界觀となると能の形而上学と同じようには假設的なものとなつてしまふとする観點から、歴史科学と文化科学を対象と方法の上で自然科学と対比させ、その方法論的特性を明らかにせんとしていたのである。

さらに、認識の要件としての心理的契機については、これまで当時の新カント派を形成していたジンメルからの示唆によるものと思われる。彼はルカーチがベルリン大学に学んだ時の哲学教授だが、自然科学的認識と歴史研究とを媒介するものは心理学であり、歴史とは心的現象の歴史であるから、歴史研究の前提として心理の研究を出発点におくべきである、すなわち、歴史学は応用心理学である。

認識するものだが、歴史科学は、一回的、理解することであるとの主張を展開して、

（ハ）階級意識について
（ハ）階級意識について

いたのである。かくして、先にみたルカーチの見解が、マルクス主義の用語をまとつていようと、まさに、新カント派の見解に他ならないことは明白であろう。（われわれはここでは、認識の方法にだけ問題をしほつて論じてきが、ルカーチの見解には認識における別の側面の問題に、すなわち、人間はそもそも事物の真の姿、関連を、なぜ、どのようにして認識できるかという問題が含まれているのであるが、それに関しては、後にルカーチの反映論を検討するときに論することにする）。

以上みてきた、物象化にたいするプロレタリアートの意識とは何をさしているのであるが、それに関しては、後にルカーチの反対論を検討するときに論しない。

「資本主義とともに、身分構成の底堅いともに、純粹に經濟的に組織された社会の建設とともに、階級意識は意識されよう」という段階にはいった。いまや社会的闘争は意識をめぐつてのイデオロギー闘争といふかたちであらわるのである」社会のブルジョアジーとプロレタリアートの二大階級の分裂をもつて階級意識

はじめて意識される可能性をもつてゐる。かくして、資本主義における社会的闘争はイデオロギー闘争という形をとるのである。そして、ブルジョアジーもプロレタリアートも自己のうちに階級意識と階級利害の弁証法的対立をもつてゐてこの矛盾を解決できないのである。

「資本家の関心はへ生産という觀点からすれば）副次的な問題（すなわち流通）に固執せざるをえない、つまり資本家は……経済現象を考察する視点としてはそ

こからきわめて重要な現象を一般に認識することができないような視点をとらざるをえない。このよくな（資本家の関心、と認証との）不適合性は、資本關係そのものの中で個人的原理と社會的原理とが、相互に解決しがたく弁証法的に矛盾しているということによって、ますますひどくなる。……しかしこの社會的力の運動は——この

くる」。階級闘争の攻防環は、以上のごときものであるがゆえに、「意識をめぐる闘争のなかで、決定的な役割を果たすのは史的唯物論である」といえよう。そして、先にみたようにブルジョアジーが社會的原理を認識しえないのでたいが社会的原理を認識しえないのである根拠はつぎのようなものである。

「プロレタリアートを他の諸階級から區別するものは、プロレタリアートが、歴史の個々の出来事にかかずらうことにとどまりはしないし、またその出来事によつてたんに動かされるものでもなく、みずからを「歴史の」原動力の本質となし、中心となつて行動し、歴史的發展過程の中核にはたらきかける、ということができる。したがつて、自分が中心になつて現実を変革すべく行動できるといふこと、またプロレタリアートの階級意識

力の活動の社會的な機能を認めることができず、したがつて必然的にこの機能について配慮することがない——資本所有者の個別的な利害によつて導かれるのであるから、資本の社會的原理、すなわち、資本の社會的機能は、資本所有者の頭腦の上を通り越してならく、すなわち、資本所有者の意志をかれら自身に意識されることはなく、貫き通していくことがで

きる。このような矛盾が社會的原理と個人的原理とのあいだに存在するのである。

すなわち、資本家は、資本の自己増殖の本質に規定されることによつて、その意識を私有財産としての資本の機能、個人的原理・関心に限定せざるをえない

のであって、資本の客観的・經濟的機能、社會的原理、認識にまで普遍化することができないのである。要するに資本家は、

取得の私的性格に注目するのみで、生產の社會的性格を配慮することができないのである。かくして、今や社会はこの社會的

原理と個人的原理との葛藤の場となるの

にとつては、理論と実践とが一致すると、いうこと、それゆえまた、プロレタリアードは、自分の行為を決定的な要因として意識的に歴史的發展という軸にかけることができるということ、これらのなかにがあるのである」。

プロレタリアートは、社會的原理を自己の使命として認識していることによつて、ブルジョアジーよりも優位な立場に立つてゐるのである。したがつて、ブルジョアジーにまさるプロレタリアートの意識は以下のようにあらねばならない。

「プロレタリアートは階級社会一般を廃止することなしには、階級としてのみずからを解放することができないと、まさにこのことによつて、プロレタリアードの意識、すなわち人類の歴史上での最後の階級意識は、一方では社会の本質を暴露することと合致し、他方では理論と実践とのますます緊密な統一とならず」とおかないのである。プロレタリアートにとって、かれらのハイイデオロギーが存在するがゆえに、この矛盾を生産的

である。すなわち、「他の諸階級が、階級的意識を自覺しないでいることがアル・ジョア支配体制の存立にとって不可欠な前提となるのである」。したがつて、「このようなハイイデオロギー的要因の實際のはたらきを過大視するわけではないが、一つの階級の闘争力は、かれらが自分の本能をもつて貫くことができればできることなく、ますます強大になる」のである。

このように階級闘争の広さと深さは、

相対する階級が、自己の使命にたいする利害とのあいだの經濟的な調整が求められる場合、……ブルジョアジーの階級意識が、プロレタリアートの階級意識の前に屈服したということが明らかになつて

未来の目的設定をかくす仮面でもなくして、目的設定そのものであり武器そのものなのである」。

先にみたように、ブルジョアジーの内部にも同様の矛盾が存在する。「プロレタリアードは社会を意識的に変革するという課題を歴史によってあたえられているから、

個々の実機と全体との弁証法的矛盾があらわれてござるをえないのである。……プロレタリアートの場合は、ブルジョアジーの場合は、このように正しいもののへの志向が、関心と認識との矛盾としてあらわれたように、プロレタリアートの内部にも同様の矛盾が存在する。」「プロレタリアードの意識、すなわち人類の歴史上での落んでいることによつて、はじめて解消されるうるものとなり、同時に矛盾は、歴史の意識的要因となる」。しかし、プロレタリアートの場合は、ブルジョアジーの場合とちがつて、正しいものへの志向

したがってつぎのようないちことがでできる。

「プロレタリアートの歴史的使命の基礎となつてゐる意識の構造、つまり既存の社会を越えて出ることが、プロレタリアートの中に弁証法的分裂を生みだすのである。……以前の科学と完璧目的との対立として、したがつてこの弁証法的分裂

を内部意識において完璧することが、階級闘争においてプロレタリアートが、外部での社会的現象の中での勝利をおさめることを可能とする」、この内部意識の克服の内容は、「眞の実践的な階級意識の強さと實力性は、経済過程が分裂した徵候を示してゐる背後に、社会の全体的發展としてのその過程の統一性を見抜く能力をもつてゐる」という点にある。

・・・資本主義の經濟的危機が深まれば深まるほど經濟過程のこの統一性が、ますますはつきりあらわれてきて、現象の中で実践的にも把握できるようになる」ということであり、そして、先の現代社会の物象化の項でみてきたこととあわせ考

えると、この完璧目的とは、「『自由の王国』すなわち『人類の前史』の終わり、

といふことが意味するのは、まさに人間相互の対象化された關係、つまり物象化が、その力を失い、人間がその力から解放されはじめるのだ、ということである」

そして、「資本主義の危機から脱出す道を示すことができるのはただプロレタリアートの意識だけである。……歴史の実習教育はかぎりない苦腦、恐しい迂回路を経たのちに、プロレタリアートの手に歴史の主導權を渡す

意識過程を完成させ、それによつてプロレタリアートの手に歴史の主導權を渡すのである」ということが歴史の必然的帰結なのである。

以上のことを総括すると、「階級意識の客觀的理論は、階級意識の客觀的可能性的理論である」とまとめられるであろう。すなわち、階級意識が客觀的に規定されるということは、階級意識が勝利する客觀的可能性が存在するということに他ならないのである。

歴史において階級意識のはたゞ役割に

ついてのべたこの件りにおいて、ルカーチは完全なヘーゲル主義者であることを

相手の対象化された關係、つまり物象化が、それをみるとまことに以上のルカーチの

見解の中にあらわれているいくつかの誤りを簡単に指摘しておこう。

第一は、階級意識の内容である。階級意識は無意識であるという唯弁ヘルカーネの場合、存在と意識との同一性といふ

なるものを認識論にもちこむこと自体非常に無意味である。とりあえずここでは、彼によって規定されているその内容を検討しておこう。

ルカーチは、それを物象化の認識、統

一性の把握、社会的公理の理解、史的唯物論、使命の自覺、等々として提起している。それは科学的社会主義の二大綱である、剩余價値の秘密の解明を基礎にして、経済過程を一つの自然史的过程として把握するマルクス主義經濟学と、

生産の一定の歴史的發展段階に照應する階級闘争の歴史を唯物論的に解明する史的唯物論によるブルジョア社会の認識それが自体に他ならない。

ルカーチの階級意識は、奪取と支配をめぐる現実の階級闘争の中で生みだされ、ある階級的レーニンの場合はもっぱら革命的・政治的意識として問題にされていなかった。なぜルカーチは、階級闘争という現実の物質的土台の上にたつ意識を問題とできないのだろうか。それは彼が、階級そのものを、その唯物論的基盤においてとらえていないからである。そのことは、ルカーチの階級の規定とレーニンの階級の規定をくらべてみれば一目瞭然である。

「階級とは生産過程の中の一定の類型的な状態である」。この一定の類型がなにをさしているのかまったく明らかにされていない。こゝに反してレーニンは、「偉大な創意」の中できづめて厳密にきのようになつてゐる。「階級」と呼ばれるのは、歴史的に規定された社会的生の体制のなかで占めるその地位が、生産手段をたいするその關係へその大部分は法律によって確認され成文化されている)が、社会的労働組織のなかでの役割が、したがつて、彼らが自由にしうる社会的

主観的意識とは、その中で形成される意識に他ならない。レーニンは、「社会民主主義綱領草案と解説」の中で、労働者の階級的自覺について、つぎのように述べてゐる。

「労働者の階級的自覺とは、労働者が、自分の地位を改善し、自分の解放をかかる唯一の手段は、大工業によつてつくられたされた資本家や工場主の階級との闘争にあるということを理解することである。さらに、労働者の自覺とは、ある一定程度の全労働者の利害は同一で一致しておらず、彼らの全体は社会の他のすべての階級と別個の一つの階級をなしていいるといふことを理解することを意味している。

最後に、労働者の階級的自覺とは、自分

の目的を達成するためには労働者は、地主と資本家が国政にたいする影響力をかちとつたし、いまなお引きつづいてかちとつてゐると同じように、彼らもまた國政にたいする影響力をかちとらなければならぬという点を、労働者が理解

するということを意味している。

ルカーチの場合、それがまったく欠けているのである。彼にあっては、人間主体と社会的客体の、一般的労働者と生産構造の関係と、それが生みだす意識が問題なのである。かくして、ルカーチの階級と階級意識に関する規定は、解釈のためのものではあっても、闘争のためのものではないといわざるをえないのである。

第二は、階級意識の基礎に関する規定。それについてルカーチは先の引用の中で次のように述べていた。

「いまや社会的闘争はイデオロギー闘争というかたちであらわれる」「他の諸階級が階級意識を自覚しないでいることが、アルジニア支配不可欠の前提となつた」「一つの階級闘争は、かれらが自分の使命にたいする信念を、良心にしたがつてもつことができればできるほど……ますます強大となる」等々。

これらの規定の一つ一つがあやまつてゐる。いつの時代においても、社会的闘

争はもっぱらイデオロギー闘争といふ

たちであらわれるわけではなく、一方に

おける富の蓄積と他方ににおける貧困の蓄

積という社会的現実を土台として、搾取と抑圧、支配と被支配という利害をめぐる闘争としてあらわれるのである。階級意識を自覚しないでいること（ア）がで

はなく、労働者、被抑圧大衆がアルジニアの打倒、体制の革命的解体の必要性を自己の経験にそくして肌身をとおして感じていないことが、アルジニア支配体制の存立にとって不可欠の前提となる

のである。

階級闘争の広さと深さは、資本主義の矛盾と危機が、その物質的基盤においてどの程度進展しているかということ、さらには、その闘争が諸階級のどれだけの部分をまきこんでいるかということにかかる

心がその要因だとすることはできない。

支配の基礎は、きわめて現実的であり、物質的なのだ。支配の実態は、イデオロギーだとするルカーチの見解のあやまり

を指摘するためには、「共産党宣言」の

中の「たゞ一句を引用するだけで、まづ

たく十分であろう。

「アルジニア階級の存在と支配とのた

めのもつとも根本的な条件は、私人の手

中への富の累積、資本の形成と增大である。」

第三は自由の王国という共産主義に關する規定である。

ルカーチは、それをもっぱら物質化の解説という点にもとめている。たしかにそれは共産主義の一つのマルクス主義である。しかし、そのような状態を想像させるためには、いくつかの物理的条件が關いとられなければならないのである。

これは共産主義者たるんとするものは、バラ色の未来をおもいめぐらすだけではなく、これらの条件を解明し、宣伝できなければならない。マルクスが、

「資本論」の中で、「社会的生活過程すれば、科学的社會主義者たらんとするもの

のは、バラ色の未来をおもいめぐらすだけではなく、これらの条件を解明し、宣伝できなければならない。マルクスが、

「資本論」の中で、「社会的生活過程すれば、科学的社會主義者たらんとするもの

くがまたもや出そろつてくるにちがいな
いからであり、さらにはまた、ただ生産
力のこの普遍的な発展とともにのみ人間
たちの普遍的な交通が実現していく、こ
のことからそれは一方において「文なし
大衆の現象をあらゆる民族のうちに同時
に生みだし（普遍的競争）、それら諸民
族のそれぞれを爾余の民族の変革に依存
させ、そしてとどのつまりは世界史的な
諸個人、つまり普遍的な経験を有する諸
個人を局地的な諸個人にとつて代わらせ
ているからである。」

ルカーチもたしかに、計画経済云々と
いう形で、生産手段の社会化に言及して
はいる。しかし、それは、除外された商
品生産の物質的性質を打破するための決
定的条件としては述べられていないだけ
でなく、そもそも貧弱な生産力という歴
史的発展段階が生みだした階級の在り方、
物質的に不要なものとする条件としての
生産力の発展という観点からも提起され
ているわけではない。したがって、ルカ
ーチの物象化の解消された社会（共産主
義）の項で検討する）

ともに階級意識は意識される段階にはい
った。階級意識と階級利害は矛盾しあう
關係にあるが、それは弁証法的なもので
ある。自分の使命にたいする信念を良心
なわち人類の歴史の終りとは、物象
化がその力を失い、人間がその力から解
放されること。プロレタリアートの意識
すなわち人類の歴史上で最後の階級意識、
プロレタリアートの「イデオロギー」は
目的設定そのもの。階級意識の中には直
接の利害と充権的目的との弁証法的矛盾、
つまり個々の契機と全体の弁証法的矛盾
があらわれる。プロレタリアートの階級
意識における矛盾は、このように正しい
ものへの志向が潜んでいることによつて
はじめて解決される。この弁証法的分裂
を内部意識において克服すること。階級
意識は階級の歴史的状態の意味が意識さ
れたもの」等々である。

ようするにルカーチはつきのようによ
つているのである。階級意識とは超歴史
的な概念であるがそれは資本主義社会に

義という規定はそのための物質的条件の
解説を欠いた抽象化された理念にすぎな
い。へなれ、ルカーチの「空想より科学
へ」中の必然から自由への飛躍に關する
エンゲルス批判は後の彼の政治的傾向を
判の項で検討する）

ルカーチの歴史哲学（？）はかくして
完結するのである。それはヘーゲル流の
思弁の体系に他ならない。彼にあっては、
思弁的説明の内部

おおい闇されている。それは「思弁的叙
述の内部で現実的な、事そのものをとら
える叙述をしている。思弁的説明の内部
におけるこうした現実的説明は、読者を
深むせて思弁的説明を現実的なものとお
もわせ、現実的説明を思弁的とおもわせ
るのである」という「聖家族」の中で特
徴づけられたヘーゲル的叙述の形式をと
っている。従つて、ルカーチの論理展開

の結節点をなしているいくつかの主要な
據點を「物質化とプロンタリアートの意
識」「階級意識」の中からとりだしてみ
よう。

「自分のあり方の弁証法的本質を意識
すること。人格の二重化。商品として自
己を客体化する人間の中で客体と主体と
が分裂する。それによってこの転化（生
産過程のたんなる客体への労働者の転化）
の状態は同時に意識されうるものとなる。

歴史の發展は階級意識の自己展開として
とらえられている。それは自己意識とい
う概念の外化であり、その具体的媒介
をとうしての自己回帰である。しかし、
このルカーチの認識論の眞の性格は一見
おおい闇されている。それは「思弁的叙
述の内部で現実的な、事そのものをとら
える叙述をしていて。思弁的説明の内部
におけるこうした現実的説明は、読者を
深むせて思弁的説明を現実的なものとお
もわせ、現実的説明を思弁的とおもわせ
るのである」という「聖家族」の中で特
徴づけられたヘーゲル的叙述の形式をと
っている。従つて、ルカーチの論理展開

認識としてすでに実践的であるずなわ
ての内部で現実的な、事そのものをとら
える叙述をしていて。思弁的説明の内部
におけるこうした現実的説明は、読者を
深むせて思弁的説明を現実的なものとお
もわせ、現実的説明を思弁的とおもわせ
るのである」という「聖家族」の中で特
徴づけられたヘーゲル的叙述の形式をと
っている。従つて、ルカーチの論理展開

認識としてすでに実践的であるずなわ
ての内部で現実的な、事そのものをとら
える叙述をしていて。思弁的説明の内部
におけるこうした現実的説明は、読者を
深むせて思弁的説明を現実的なものとお
もわせ、現実的説明を思弁的とおもわせ
るのである」という「聖家族」の中で特
徴づけられたヘーゲル的叙述の形式をと
っている。従つて、ルカーチの論理展開

それが不当であるかどうかは判断して
いた。それは現実の利害という除外された
直接的姿と終局の目的という解放された
本來的姿として分裂してあらわれる。そ
れらは、種々の媒介をとおして統一され
るが、その最終的契機は、直接性と本
來性に共通する基底的概念としての人間
的本性である。

この本性は、階級意識の本來の姿が外
化され、除外されてあらわれるという、
まさにそのことによつて、この直接性を
自覚し、それを克服するのである。この
本性は、今、この直接性の中にあつて自
己のうちにあり、将来本質性の中におい
てあるべき自己に還帰する自己意識に他
ならない。このルカーチの見解は一つの
遠大な歴史哲学の体系である。しかしそ
して、あるべき自己に還帰する自己意識に他
ならない。このルカーチの見解は一つの
遠大な歴史哲学の体系である。しかしそ
れではまるで自己意識が世界を定立する
ことはまるで自己意識が世界を定立する
ことによつて、区別を定立し、それがつ
くり出すもののうちに、自己自身をつく
りだす——というのには、自己意識は、つ

れば、「精神はなんのためにあるのか？」こ
れではまるで自己意識が世界を定立する
ことはまるで自己意識が世界を定立する
ことによつて、区別を定立し、それがつ
くり出すもののうちに、自己自身をつく
りだす——というのには、自己意識は、つ

くりだされたものと彼自身との区別をあたたび揚棄するのであるから、したがつて「つくりだすことのうちに、また」運動のうちでだけ、自己自身であるのだから——ことがないかのようであり、また、自己意識が、自己自身であるこの運動のうちで、自分の目的をもつということが、そりとして自己自身をはじめて所有するということがないかのようだ!」「『発見されたキリスト教』」……ヒンリヒス君たずけてくれたまえ!

第一の句はよつうのことばでいえばこうなる。唯物論の真理は、唯物論の反対、すなわち絶対的な、つまり排他的な、法外な概念論である。自己意識、精神がすべてである。そのほかは無である。「自己意識」「精神」は、世界の、天地の、全能な創造者である。世界は自己意識の生命の発見であつて、自己意識は己れを空しうして僕(しもべ)のすぐたをとらねばならぬが、世界と自己意識の区別は外見上の区別にすぎない。自己意識が自分から区別するのはけつして現実的なものである。

存在するとともに、また人間自身の自然でもあるところの自然である。いかなる領域においても実体を前提しないこと——彼はいまだにこんなことばをつかつてゐる——このことは彼によると、こうなる。すなわち、思考から区別された存在、精神の自発性から区別された自然のエネルギー、悟性から区別された人間的本質力、能動から区別された受動、みずから影響をおよぼすことから区別された他から影響をうけること、知識から区別された感情と意志、頭脳から区別された心臓、主観から区別された客觀、理論から区別された実践、批判家から区別された人間、抽象的普遍性から区別された現実的共通性、我から区別された汝、などを認めないことである」

このように、マルクスはヘーゲルをこえたと称する当時の青年ヘーゲル派が、「ヘーゲルにたいする彼らの論駁と彼ら相互間の論争は、実体とか自己意識とかいうことである」

のではない。世界はむしろ形而上學的な分別であり、彼の靈氣的な頭脳の一つのつくりことであり、それの一の構想で、さるものすぎない。だから自己意識は、あくかも何ものかが彼の外部に存在するかのようにみえる外見を、一瞬のあいだ認容したのであつたが、あたたび揚棄して、彼の「つくりだされたもの」のうちに、実在的な、したがつて彼から実在的に区別された、対象をなんら認めない。

だがこの運動をつうじて、自己意識ははじめて自己を絶対的なものとしてつくらしすのである。なぜなら、絶対的體念論者は、絶対的體念論者であるためには、経過しなければならないから。つまり、その外部にある世界を一つの外見上の存在に、彼の頭脳のたんなる思いつきにかけておき、あとからこの幻想のすぐたを、あるがままに、つまりたんなる幻想にあると説明する。そしてそれは、最後に、はや外界などの外見にわざわざされるこ

のちにはこれらのカテゴリーは、類、唯一者、人間等々のような世俗的な名稱によつて俗化された」(ドイツ・イデオロギー)ものにすぎないことを暴露したのである。

われわれは、ルカーチが、マルクスによるヘーゲル弁証法の唯物論的転倒を考慮せず、マルクス主義における弁証法の繼承だけを問題とすることによって、これに近いものにならざるをえたかったとするのである。⑤ 他方、ここには同時に、もう一つのどのような契機がよくされてゐる。すなわち、自己意識がこのようないくつかの外化と対象性とをまた同じしようと止揚し、自己のうちに取りもどしてしまつてゐる。すなわち、自己意識がこのようないくつかの外化と対象性とをまた同じしようと止揚し、このようないくつかの外化と対象性とをまた同じようと止揚し、その他の在そのもののうちとある「対象」のものにある、といふ契機である。⑥

「意識はこの虚無性もしくは対象的本質をみずからのお己外化として知つてゐるから、また意識は、この虚無性がみずからのお己外化によつてのみあるといふことを知つてゐるから、意識自身にとつて対象の虚無性は肯定的な意義を持つことである」

一語一語ヘーゲルに見いだすことができる。しかもこれを彼の最初の著作『意識』(1807)と見いたすことができる。

「[自己]意識の外在化において、自己意識は自己を対象として、あるいは対象を自己自身として定立する。」(「自己」)の外在化において、自己意識は自己を対象として、あるいは対象を自己自身として定立する。他方では、これは同時に、この意識の運動である」(ヘーゲル『現象学』)

……批判なるものは彼(バウアー)の手元にあつては、無限の自己意識のそとにあつて、なお一つの有限の物質的存在を主張するすべてのものを、たんなる外見に、純粹の思想に純化するための道具である。彼が實体において攻撃しているのは、形而上學的幻象ではなくして、現象学

なわち意識がこうした外化と対象性とを同じように止揚し、自己のうちに取りもどしてしまっているという契機、したがつて意識がそれの他在そのもののうちにあつて自己のもとにあるという契機が存する、とヘーゲルはいう。

こうした説明のうちに「思弁のあらゆる幻相が集約されているのを、われわれは見いだす。第一に、意識、自己意識は、その他在そのもののうちにあつて自己のもとにある。だから、——いいかえれば、ここでわれわれはヘーゲル的な抽象を度外視し、自己意識の代りに人間の自己意識をおくならは——それは他在そのもののうちにおいて自己のもとにあるわけである。そこにほんによりもます、意識——知識としての知識——思惟としての思惟が、直接に意識自身の他者であり、感性、現実性、生命であると詐称していることが含まれている。——それは思惟において自分の力以上のことをしている思惟（フォイエルハッハ）である。たんなる意識としての意識が、度外された対

象性ではなく、対象性そのものこみで

同じように止揚し、自己のうちに取りもどしてしまっているから、このようないい側面がここに含まれるのである。

第二に、ここにはつきの二点が存してゐる。すなわち（一）意識をもつて人間は、精神的世界を——あるいは他の世界の精神的な一般的現存を——自己外化として認識し止揚していたのであるが、そのかぎりにおいてなお彼は、この世界をこの

外化された形姿でよたたけ認し、自分

の真の現存だとし、この世界を再建し、

その他在そのものうちにあつて自己のものとあると称することであり、

したがつてたとえば宗教を止揚した後に、宗教を自己外化の一產物として認識した

後で、しかもなお宗教としての宗教のうちに自己が確証されているのを見いだす

ということである、（二）にヘーゲルのいつわりの実証主義、あるいは彼のみせかけだけの批判主義の根源があるので

「それゆえ一種独特の反對を演ずるの

は、否認と保存すなわち肯定とがそこで結合されているところの止揚ということ

である。

こうしてたとえば、ヘーゲルの法哲学から、神は世界史に等しいとされる。現実においては、私権、道徳、家族、市民社会、国家等々は、あいかわらず存続している。ただそれらは諸契機になつたにすぎない。止揚された道徳は家族に等しく、止揚された家族は市民社会に等しく、止揚された市民社会は国家に等しく、止揚された国家は世界史に等しいとされる。現実に止揚された私権は道徳に等しく、止揚された家族は市民社会に等しく、止揚された市民社会は国家に等しく、止揚された国家等々は、あいかわらず存続している。ただそれらは諸契機になつたにすぎない。止揚された私権が道徳の思惟のなかへと止揚されるのである。しかも、思惟は直接に自分自身の他者、感性的な現実であると解消しあつたり產生しあつたりするよな、人間の諸々の現実存在と存在様式、すなわち、孤立しては通用しない、相互に結合され、それが止揚したことによって、なつたにすぎない。つまり運動の諸契機なのだ」

「一面では、こうした止揚は思惟された存在の止揚であり、したがつて思惟されないことを例証するためである。

ヘーゲルにあつては、絶対的理念、精神はみずから絶対性を現実の中で論証するために、自己疎外して現実的な世界

の中に姿を現わす。この世界は有限な対立的世界であるから、この姿は理念、精神と疎遠なものとなり、またこの世界の他のものと相互に疎遠に對立することになる。

すなわち、個々の現実はその否定における。そして、それは、種々の疎外された

形態をとつて現われいでそのどれにおいても本質と直接性との内的矛盾として自己自身をみつめなおして、かくして、そのそれを直接性の止揚された内容を自覺するのである。

すなわち、個々の現実はその否定において肯定され、かくして、眞の統一において止揚される諸契機、総体的認識のための媒介となるのである。

マクスは、ドイツにおけるヘーゲルの理念、精神は、分裂を通じて自己展開するとともに、あたび自己へと帰還する。つまり、理念、精神は、分離され絶対的な統一である理念、精神へと帰還する。つまり、理念、精神は、分離され絶対的な統一において止揚される諸契機、総体的認識のための媒介となるのである。

（二）まとめて

例え、主觀と客觀との対立が現われるとされてゐるのがそれである。しかし、

この対立はふたたび克服され絶対的な統一である理念、精神へと帰還する。つまり、理念、精神は、分離され絶対的な統一において止揚される諸契機、総体的認識のための媒介となるのである。

すなわち、個々の現実はその否定におけるうとしているのかとかについて、

「人間は、自分達が何であるのかとか、何であるうとしているのかとかについて、

自分たち自身に関してまちがつた観念を、これまでいつも自分の頭の中にこしらえていた。神とかまともな人間らしい人間

とか等々についての自分たちの観念にのつとつて、彼らは彼の関係を律してきた。

マルカーチの階級意識という自己意識もかくのごとき運動を示すのである。それ

は、歴史の本質としてまず前提されてい

るわけである。

われわれは長々とマルクスを引用してきながら、それは先にみたルカーチの世界は、歴史の本質としてまず前提されてい

るわけである。だからこそヘーゲルは、それらのよく直面する諸概念に反対する

彼らの頭から生まれた怪物は彼らの頭ごしに大きくなつた。自分たちの産物の前に創造者である人間は屈伏した。人間にのしかかって彼らをいじけさせているもろもろの妄想や観念や教義、妄想された存在者どもから彼らを解放しようではないか。このもろもろの思想の支配に反逆しようではないか、これらの妄想を人間の真のありかたにかなつた思想とりかえることを彼らに教えようとする者はいい、それらの妄想に批判的な態度をとることを教えようとある。

ルカーチは、物象化の観念をしてよと呼びかけることによって、まさにけなげな男と同じことをめざさんとしたのである。われわれは、長々トルカーチの物象化と階級意識論をみてきたが、その観念的性格は明白である。

彼の世界觀は、歴史を解釈し説明するものではあっても、それを実践的に変革し、革命するためのものではない、といわねばならない。

以上のことからして、われわれは別な男がある時、人間が水に溺れるのは重さの觀念のとりこになつてゐるからにすぎないといふんだ。この觀念をなにか迷信的な、宗教的な觀念だといふうに宣言でもしてそれを念頭から追いはらえば水難のおそれなしと考えた。生涯この男は重さの幻想と、その有害な結果につ

いてはあらゆる統計が彼に新しい数多くの証明を提供した——をぶちこわすため、に闘つたこのけなげな男が、ドイツの新らしい革命的学者たちの典型だったのである。

この連續的な直感であり実際の歴史の筋の通つた読み方であり、実体と客体の間のハランにみちた関係、はてしない交流べての事実と緊密に結びついた集合体のことである。・・・ルカーチの弁証法は、

あり、すべての可能的および現実的な存在ではなくて、われわれが知つてゐるすべての事実と緊密に結びついた集合体のことである。・・・ルカーチの弁証法は、この連續的な直感であり実際の歴史の筋の通つた読み方であり、実体と客体の間のハランにみちた関係、はてしない交流べての事実と緊密に結びついた集合体のことである。・・・ルカーチの弁証法は、

マルクス・レーニン主義通信 // 月号

発行日・1976.11.10

連絡先・横浜市港南郵便局

私書箱 / 6号

郵便振替・横浜 3719

定 價・100円